

春秋繁露通解並びに義証通読稿十二

卷十〔全〕——診察名号第三十五・実性第三十六・
諸侯第三十七・五行対第三十八——

近藤 則之

A Translation of the Ch' unch' iu-fanlu
and Reading of Yicheng, Part 12

Noriyuki KONDOU

序

本稿は『春秋繁露』の通解を、蘇輿の『義証』を通読し、その説に基づきながら試みたものである。今回は卷十の全篇、診察名号第三十五・実性第三十六・諸侯第三十七・五行対第三十八四篇について行った。従来と同じように、本稿においても、本文と注をそれぞれ分離して、通読通解を行い、注の本来の位置を①・②・③……の記号で示す形式を取っている。また、従来同様、「」は蘇輿の自注を示し、「（）」は、訳者注を示す。

底本は、宣統庚戌本『春秋繁露義証』（中文出版社印行本）である。

深察名号第三十五①

〈義証〉

①本書の郊語篇（第六十五）に、「聖人は名を正す。名は虚しくは生ぜず」と。天地陰陽篇（天道施第八十二の誤）に、「名号に之れ由り、人事起こる」と。『儀礼』喪服伝に、「名は、人治の大なる者なり」と。『左氏伝』に、「名は以て義を制す」（桓公二年）と。『釈名』（卷四）に、

「名は、明なり。名実をば分明ならしむ」と。『尹文（子）』大道篇に、「形は以て名を定め、名は以て事を定め、事は以て名を検みす。其の然る所以を察すれば、則ち形名の事物に与ける、其の理を隠す所無し。名に三科有り。一に曰く、物に命くるの名、と。方円白黒、是なり。二に曰く、毀誉の名、と。善悪貴賤、是なり。三に曰く、況謂の名、と。賢愚愛憎、是なり」と。案ずるに、名家の学は、微を綜べ実を覈ふるを功と為す。名を正し詞を析かつを本と為す。此れ即ち名の学なり。『荀子』も亦正名篇有り。『春秋』は人を治むるに必ず先に名を正す。『穀梁』は「五石」・「六鰭」（僖公十六）の詞に于いて其の微を発らかにす。公羊の学も蓋し之と同じ。

第一節

〈本文〉

天下を治むるの端は、弁大を審らかにするに在り。① 弁大の端は、深く名号を審らかにするに在り。② 名は、大理の首章なり。③ 其の首章の意を録して、以て其の内の事を窺へば、則ち是非知る可く、順逆自づから著はれ、其れ幾ど天地に通ぜん。是非の正は、之を順逆に取る。順逆の正は、之を名号に取る。名号の正は、之を天地に取るなり。天地を名号の大義と為すなり。④ 古の聖人、謫して天地に効ひ、之を号と謂ふ。⑤ 鳴して命を施し、之を名と謂ふ。⑥ 名の言為る、鳴と命となり。号の言為る謫して効ふなり。⑦ 謫して天地に効ふ者を号と為し、鳴して命する者を名と為す。名号は声を異にして本を同じくす。皆鳴号して天意に達する者なり。⑧ 天、言はずして、人をしてその意を発せしむ。為さずして、人をして其の中を行はしむ。名は則ち聖人の天意を発する所なり。深く観ざる可からざるなり。⑨ 受命の君は、天意の予ふる所なり。故に号して天子と為す者は、宜しく天を視ること父の如くし、天に事ふるに孝道を以てするなり。⑩ 号して諸侯と為す者は、

宜しく謹んで候奉する所の天子を視るべきなり。① 号して大夫と為す者は、宜しく其の忠信を厚くし、其の礼義を敦くし、善をして匹夫の義より大にして、以て化するに足らしむべし。② 士とは事なり。③ 民とは瞑なり。士に化するに及ばずして、事を守りて上に従はしむ可きのみ。④ 五号は自ら讀じ、各々分有り。⑤ 分中の委曲に各々「各」と「曲」に作る。注によつて改める。⑥ 名は、号よりも衆く、号は其の大全なり。⑦ 名なる者は、其の別離分散に名づく。⑧ 号は凡にして略、名は目にして詳かなり。(もと「名詳而目」に作る。注によつて「名目而詳」改める。⑨ 目とは徧く其の事を弁するなり。凡とは独り其の大を挙ぐるなり。⑩ 鬼神を享るの号は、⑪ 一に「祭」と曰ふ。「祭」の散名は、春を「祠」と曰ひ、夏を「祔」と曰ひ、秋を「嘗」と曰ひ、冬を「烝」と曰ふ。⑫ 禽獸を獵るの号は、一に「田」と曰ふ。「田」の散名は、春は「苗」、秋は「蒐」、冬は「狩」、夏は「獮」なり。⑬ 皆天意に中らざる者有ること無し。物に凡号有らざる莫く、号に散名有らざる莫きこと、是くの如し。⑭ 是の故に事は各々名に順ひ、名は各々天に順へば、天人の際は合して一と爲り、⑮ 同じて理に通じ、動きて相益し、順ひて相受くる、之を徳道と謂ふ。⑯ 『詩』(小雅、正月)に曰く、「維れ号して斯れ言ひ、倫有り、迹有り」とは、此を之謂ふ。⑰

〈義証〉

① 「弁」は別なり。事物の別異する所以と其の大綱とを審らかにす。故に曰く、「弁大」と。下に云ふ、「目とは徧く其の事を弁するなり。凡とは独り其の大を挙ぐるなり」と。正に二字の義を積す。事、能く弁すれば、則ち治まる。故に弁、亦「治」に訓ず可し。『書』に曰く、「章かに百姓を弁ず」と。『史記』礼書に、「治弁の極なり」と。『荀子』礼論に、「君とは、治弁の主なり」と。楊(倅)注に、「能く人を治めて弁別

有らしむるを謂ふなり」と。又(『荀子』王霸・榮辱等の篇に見ゆ。蓋し「弁」とは治の条理にして、「大」とは治の要綱なり。『礼』樂記に、「其の功大なる者は其の樂備はり、其の治弁する者は其の礼具はる」と。亦「弁」「大」を以て文を対す。或いは弁大を以て其の大を弁ずと為すは、之を失す。

② 『荀子』正名篇に、「今、聖王没し、名の守り慢りなり。奇辭起り、名実乱れたれば、則ち守法の吏、誦数の儒と雖も、亦皆乱るるなり。若し王者の起る有らば、必将ず旧名に循ふことありて、新名を作すこと有らん。然れば、則ち名有る所為と、縁り以て同異する所と、名を制するの枢要とは、察せざる可からざるなり。異形には離心交々諭り、異物には名実玄紐し、貴賤明らかならず、同異別たす。是くの如くなれば、則ち志必ず諭らざるの患ひ有り、此れ名有る所為なり」と。

③ 「理」は、分なり。(『礼記』樂記の鄭注に見ゆ。又『白虎通』(情性篇)に云ふ、「礼義なる者は、分理有り」と。)分は、必ず以て之を括る有り。「首章」は、其の大分を括る所以なり。古人書を著して、綱領有るに当たれば、之を首章に列す。故に此に、事物に名有るは、猶ほ大理の首章の如くなるを言ふ。後人、事を議するに、亦首章を以て綱要と為す。

④ 『釈名』に、「天は、顕なり。上に在りて高く顕かなり。地は、底なり。其の体は底下にして、万物を載するなり」と。案するに、崇きこと天に効ひ、卑きこと地に法る。君臣・父子・夫婦の義は、皆此に本づく。其の名を聞けば、則ち其の實を諭る。夫の人心の受くる所に逆らへば、則ち礼法以て禁を為す可し。故に分を「名分」と曰ひ、教へを「名教」と曰ふ。分と教へは皆名より生ず。天下をして凜然として敢へて犯ざらしむ。此れ世を治むるの枢要なり。名号を略視して世変すること亟かなり。

⑤ 〇虚(文昭)云ふ、「謫」は旧音、火角の切。案するに、『集韻』

(卷八第三十六)に、『許教の切、大皞なり』と。『莊子』齊物論に、『激する者、謫する者』と。『釈文』(莊子音義上)に云ふ、『謫、音孝なり。(唐)李軌、虚交の反』と。此れ效・号と声、相諧すれば、則ち当に『釈文』・『集韻』の音とする所に従ふて之を得と爲す』(『春秋繁露注』)と。

⑥『中論』貴驗篇に『子思』を引いて曰く、『事は自づから名づけ、声は自づから呼ぶなり』と。○盧云ふ、『施命』、旧本、倒して『命施』に作る。非なり』(『春秋繁露注』)と。

⑦此れ声を以て訓を爲す。

⑧盧云ふ、『鳴号』の『号』は平声にして、亦疑ふらくは本是れ『謫』の字なり』(『春秋繁露注』)と。

⑨名は、字に起こり、字を積んで名と爲す。故に名は亦字に訓ず。字は事物を別ち、上下を明らかにする所以にして、其の造作は天意に基づく。故に書を造る者は之を聖人と謂ふ。

⑩天を敬ひ、祖に法り、民を愛する、是れ天子の孝と謂ふ。○「視」凌(曙)本「事」に作る。

⑪『白虎通』爵篇に、『候』とは『候』なり。逆順を候ふなり』と。『公羊疏』に『元命苞』を引いて云ふ、『候の言は候、逆順を候ひ、兼ねて王命を伺候するなり』と。

⑫『白虎通』爵篇に、『大夫の言爲る大扶なり。扶けて人を進むる者なり。故に伝に曰く、『賢を進め能を達する、之を大夫と謂ふ』』と。案ずるに、此れ別の一義なり。

⑬『白虎通』爵編に、『士は事なり。事に任ずるの称なり』と。『説文』(第一篇上)に、『士は、事なり。数は一に始まり、十に終はり、十と一とに从ふ。孔子曰く、『十を推して一に合するを士と爲す』』と。

⑭「士」とは民の秀づる者なり。民も亦士の材質を具有す。但だ未だ尽くは道に化するに及ばずして、事理に達する能はず。塵かに静かに法制

を守り、上令に従はしむべきのみ。天下の衆百姓を合するに、固より宜しく此の賢愚の差等有るべし。子曰く、『民は之に由らしむ可し。之を知らしむ可からず』(『論語』泰伯第八)と。正に此の義なり。『論語』鄭注に、『民は冥なり。其の人道を見ること遠し。』由』は従なり。言ふところは、王者教へを設け、人をして之に従はしむるに務む。若し皆其の本末を知らば、則ち愚者は或いは軽んじて行はず』と。案ずるに、鄭注に言ふ所は術に近し。董義の純なるに如かず。程子已に陰かに之を闡く。朱子、『論語』を釈して曰く、『民は之をして事理の当然に由らしむ可けれども、而も之をして其の然る所以を知らしむ可からず』(『論語集註』)と。正に董義を用ふ。賈子(『新書』)大政篇(下)に、『夫れ民の言爲るや、暝なり。萌の言爲るや、盲なり。故に惟だ上の扶けて以て之く所は、民化せざる無きなり。故に『民は萌なり』』と曰ふ。民は萌なるかな。直だちに其の意を言ひて之が名と爲すなり。夫れ民とは、賢不肖の材なり。賢不肖皆具はる』と。『史記』礼書に、『人域は是れ域(此の「域」は衍文なり)士君子なり。外は是れ民なり』と。知る、士と民とは徳と字を以て分かつを。○官本に云ふ、『他本、下に『丑』の字を衍す』と。

⑮天子より民に至るまで、各々分義あり。

⑯文中、各々応に尽くすべきの職事有り。其の委曲を得て、然る後に以て各々其の名を称す可し。下の「曲」の字疑ふらくは、「各」の誤りならん。

⑰猶ほ「大凡」のごとし。

⑱万物の総総たる、名に藉りて以て之を散殊す。○上の「名」の字、天啓本「暝」に作る。凌本同じ。今は盧本に従ふ。兪云ふ、『此れ、本、『号其大全、名其別離也』に作る。故に下文に曰く、『号凡而略、名詳而目』と。応に之を承けて言ふ。『暝也者』の三字は、當に上文に在るべし』(『春秋繁露平議』)と。案ずるに上文に云ふ、『士なる者は、事

なり。民なる者は、暝なり。士、化するに及ばざれば、事を守りて上に従はしむ可きのみ」と。此の下当に「暝也者云々」有るべし。乃ち「民は民とは暝なり」の義を積す。伝写して之を奪し、又誤つて著けて後に在るのみ。

⑲疑ふらくは、「名目而詳」に作りしか。僖五年（公羊）伝に、「一事にして再見するは、目を前にして凡を後にするなり」と。亦「凡」「目」を以て対して挙ぐ。案するに、伝に名号の分無し。惟だ「穀梁」の桓二年「部の大鼎」の伝に孔子を引いて曰く、「名は主人に従ひ、物は中国に従ふ」と。而して襄五年「善籩」の伝、昭公元年「大原」の伝、並んで「号は中国に従ひ、名は主人に従ふ」と。此れ名号を以て分かちて積す。亦春秋家の説なり。

⑳○天啓本「事」を「大」に作る。凌本「偏」を「偏」に作る。官本「大」の下に「事」の字有りて、云ふ、「他本「大」の字無し」と。

㉑「者」は「之」と同じ。○官本に云ふ、「他本「者」の字無し」と。

㉒桓七年伝なり。

㉓「祭」と「田」とは、所謂る「凡」なり、号なり。「祠」「約」「營」「烝」「苗」「蒐」「狩」「獮」は所謂る「目」なり、名なり。此を挙げて例と為すのみ。盧云ふ、「此れ公羊の説に従ふ。故に『周礼』・『左氏伝』・『爾雅』と異なる。然れども『公羊』桓公四年伝、並んで『夏は獮』の文無し。何休云ふ、『夏の田を以てせざるは、春秋の制なればなり』と。以謂へらく、飛鳥未だ巢を去らず、走獸未だ穴を離れず、幼穉を傷つくるを恐る。故に苑囿の中に於いて之を取る」と。則ち此の「夏獮」の二字は、当に是れ後人妄りに加へしなり。以て衍文と為して可なり」（『春秋繁露注』）と。輿案するに、『説苑』修文篇に、「春秋に曰く、『正月、公、郎に狩りす』と。伝に曰く、『春を「蒐」と曰ひ、夏を「苗」と曰ひ、秋を「獮」と曰ひ、冬を「狩」と曰ふ』と。苗すること奈何。曰く、苗は毛なり。之を取るには、沢を囲まず、群を掩はず。禽獸を取るに麝

卵もてせず、孕重する者を殺さず。春、蒐するには、小麝及び孕重する者を殺さず、冬狩するには皆之を取る。百姓皆出づるも、其の馳を失せず、禽を抵たず、詭遇せず、逐ふに防を出でず。此れ苗・獮・蒐・狩の義なり。故に苗・獮・蒐・狩の礼は、其の戎事を簡にするなり。故に苗には之を毛取し、蒐には之を搜索し、狩には之を守留す。夏に田せざるは、何ぞや。曰く、天地陰陽盛長の時、猛獸は攫らず、鸚鳥はたず、蝮螫は螫さず。鳥獸虫蛇すら且つ天に応ずるを知る、而るを況や人をや。是を以て古は必ず參牢有り。其の之を畋と謂ふは何ぞ。聖人、事を挙ぐれば必ず本に反る。五穀は以て宗廟に万民を養ふものなり。禽獸の稼穡を害する者を去る。故に田を以て之を言ふ。聖人、名号を作りて事義知る可きなり」と。案するに、向は「穀梁」を用ふ。当に春は田、夏は苗、秋は蒐、冬は狩と為すべし。今、「獮」の義を積せずと雖も、而も「獮」の名を列するは必ず本づく所有らん。（清）孔広森以為へらく、『周礼』は四時皆田す、伝、三時を挙ぐるは、諸侯の制なり、一を闕いて以て王に下るなり、と（孔檢討『春秋公羊通義』）。「繁露」の『公羊』の師説を証するに拠るに亦四時の田有り。然れば則ち「夏獮」は衍文に非ざるなり。又『尚書』大伝（卷六）に云ふ、「鮮とは何ぞや。秋に取嘗するなり。秋に取嘗するは何以てするや。門を習はすなり」と。「鮮」と「獮」と字同じ。『御覽』八百三十一に引きし『韓詩外伝』に、「春は畋と曰ひ、夏は狩と曰ひ、秋は獮と曰ひ、冬は狩と曰ふ」と。是れ亦近文説に「獮」の号有るの証なり。

㉔『荀子』正名篇に、「散名の万物に加はる者は、則ち諸夏の成俗に従ふ。遠方の異俗の郷に曲期すれば、則ち之に因りて通ずるを為す。散名の人に在る者は、生の然る所以の者、之を性と謂ひ、性の和の生ずる所にして、精合し感應じ、事とせずして自づから然る、之を性と謂ふ。性の好悪喜怒哀楽、之を情と謂ふ。情然くして心之が扱を為す、之を慮と謂ふ。心慮りて能く之が動を為す、之を偽と謂ふ。慮積み、能習ひて、

然る後に成る、之を偽と謂ふ。利を正して為す、之を事と謂ふ。義を正して為す、之を行と謂ふ。知る所以の人に在る者、之を知と謂ふ。知りて合する有る、之を智と謂ふ。智の能くする所以の人に在る者、之を能と謂ふ。能くして合する所有る、之を能と謂ふ。性傷ふ、之を病と謂ふ。節遇ふ、之を命と謂ふ。是れ散名の人に在る者なり。是れ後王の成名なり。故に王者の名を制するや、名定まりて実弁じ。道行はれて志通じ、則ち慎んで民を率ゐて一にす」と。

②⑤ 聖人は天に因りて以て名を制し、後王は名に循ひて以て実を責む。治を實にするは天に事ふる所以なり。

②⑥ 「徳道」は猶ほ「道徳」のごとし。

②⑦ 盧云ふ、「今の『詩』（小雅、正月）は『倫有り、脊有り』に作る」（『春秋繁露注』）と。興案するに、「迹」と「脊」と字義通ず。毛伝に、「『倫』は『道』なり。『脊』は『理』なり」と。『玉篇』に「『迹』は『跡』なり、『理』なり」と。鄭箋に、「維れ民呼号して此の言を発すれば、皆道理有り。然るに至る所以の者は、徒らに苟妄して誣辭を為すに非ざればなり」と。案するに、董は号を以て名号と為し、鄭と異なれり。然れども之を以て『詩』を解するは尤も婉曲たり。言ふところは、古の君子は名号に順ひて言を発し、皆倫理有つて、相誣妄なるざるなり。「哀し、今の人、胡為れぞ虺蜥の如く然る」（『詩経』小雅、正月の一節を承ける）、言を訛り誣陥し、変じて是非を乱し、人をして天地の間に局踏せしむ。故に下文に云ふ、「是非を審らかにせんと欲するは、名を引くに如くは莫し」と。○天地陰陽篇（天道施第八十一の誤）の「名は物を別つ所以なり」より「復して厭はざる者は道なり」に至るまでの一段は、疑ふらくは是れ此処の文ならん。

〈本文通釈〉

天下を治めることの発端は、事物個々の異同と（類別の）大綱とを明確

にすることにある。事物個々の異同と（類別の）大綱とを明確にすることの発端は、名号を深く探求することにある。名とは、大まかな事物の弁別の（第一段階であり、文章に譬えれば）第一章である。その第一章の意味を調べ、それが包含する内容を窺えば、（事物の）是非は明確となり、（事物の）序列も自然に明かとなり、やがては天地（の道理）にも通じることになるだろう。是非の正しさ（の把握）は、（事物の）序列から（導き）取り、（事物の）序列の正しさは、名号から（導き）取り、名号の正しさは天地（の道理）から（導き）取るのであり、（そこで）天地（の道理）こそ名号の根本的意義なのである。古の聖人は、（事物を）論じて（声を上げて呼んで）天地（の道理）に効うことを「号」と称した。（また、事物を）声に出して呼んで呼び名を施すことを「名」と称した。「名」を言い換えれば、「鳴」（声に出して呼ぶこと）であり、「命」（名づけること）である。「号」を言い換えれば、「誦」（声を上げて呼ぶこと）あり、「効」（做うこと）である。「誦」して天地に「効」うことが「号」であり、「鳴」して「命」することが「名」である。「名」と「号」とは呼び方は異なるが、本質は同じであり、いずれも声を出し、声を上げて（事物を）呼んで、天意に達しようとするものである。天は物言わず、人にその意志を表現させ、（意図的な）行為はせず、人にその（意志に）当たるところを行わせる。「名」は聖人が天の意志を表現するものであるから、深く探求しなければならない。（他方）受命の君主は、天意が認めるものである。そこで「号」を「天子」とするのは、天を父のように見、天に仕えるには孝道によらなければならない。「号」を「諸侯」とするものは、伺候し奉仕する天子を謹んで見なければならぬ。「号」を「大夫」とするものは、その忠信（の徳）を厚くし、その礼義を敦くし、その善を匹夫の持つ正義より大いなるものにし、（彼等を）教化するに足るだけのものにしなければならない。「士」とは「事（つかえる）」の意である。「民」とは「隕（くらしい）」の意である。

(いまだ) 士に(至るまでに)教化されるに及ばず、(どうにか)生業を守りお上に仕えることができるだけである。以上の(天子・諸侯・大夫・士・民の)五つの「号」は、(それぞれ)自ら(の内容)を表明しているものであり、それぞれに分限を持つものである。その分限の中の詳細な内容がそれぞれ「名」を有する。(従つて)「名」は「号」よりも(量的に)多く、「号」は総括的なものである。「名」は、(事物の)相違や分別を表現するものである。「号」は「凡」(概括的)で簡略であり、「名」は「目」(細目的)であり詳細である。「目」というのは、事物をあまねく弁別するということであり、「凡」というのは、ただ大まかなものを取り上げることである。(例えば)鬼神を祭る場合の「号」としては、「祭」と総称するが、「祭」の細目に与えられる「名」として、春の祭は「祠」と言い、夏は「祫」と言い、秋は「嘗」と言い、冬は「烝」と言う(のがその一例である)。(また)禽獸を狩る場合の「号」としては、「田」と総称し、「田」の細目に与えられる「名」として、春の狩は、「苗」と言い、秋は「蒐」と言い、冬は「狩」と言い、夏は「獮」と言う(のもその一例である)。(どの表現も)皆天の意志に当たらないことはないのである。物には総称たる「号」がないものはなく、「号」にはその細目に与えられる「名」がないものはないこと、以上のごとくである。そこで事物がそれぞれその「名」に従い、名がそれぞれ天に順えば、天と人との関係は合して一となり、同一化して(一つの)道理に通じ、活動して相互に裨益しあい、(人が天に)順いつつも相互に(恩恵を)受けあうこととなる。このような状態を道德と言うのである。『詩経』(小雅、正月)に、「君子は」名号に順つて発言し、(そこで)道理がある」とあるのはまさにこのことである。

第二節

〈本文〉

深く王号の大意を察するに、其の中に五科有り。① 皇科・方科・匡科・黄科・往科なり。此の五者を合して、以て一言にして之を王と謂ふ。② 王は皇なり。王は方なり。王は匡なり。王は黄なり。王は往なり。是の故に王の意、普大にして皇ならざれば、③ 則ち道、正直にして方なる能はず、④ 道、正直にして方なる能はざれば、則ち徳、匡運周偏する能はず。⑤ 徳、匡運周偏する能はざれば、則ち美、黄なる能はず。⑥ 美、黄なる能はざれば、則ち四方、往く能はず、四方、往く能はざれば、則ち王に全からず。⑦ 故に曰く、天の覆は、外無く、地の載は、兼ね愛す。⑧ 風は令を行ひて其の威に一ならしめ、雨は施を布くして其の徳を均しくすとは、王術の謂ひなり。

〈義証〉

① 凌云ふ、『後漢(書) 桓譚伝に、『科比を校定す』と。注に、『科』は事条を謂ふ』(『春秋繁露注』)と。輿案するに、其の凡を号し、其の目を科にするなり。君王の各科は並んで声に依りて起る。文字の声義相生するの旨を識る可し。

② 五義を積んで一字を成す。

③ 天啓本「而」の字無し。凌本同じ。

④ 『白虎通』号篇に、「皇は何の謂ひぞや。亦号なり。皇は君なり、美なり、大なり、天人の総、美大の称なり。時あり質あり、故に総じて之を言ふなり。之を号して皇と為すは、人に煌煌として違ふこと莫ければなり。一夫を煩はし、一士を擾して、以て天下を勞すれば、皇と為さず。匹夫匹婦を擾さず、故に皇と為す」と。

⑤ 『広雅』釈詁に、「匡は満なり」と。

⑥ 『白虎通』(号篇)に「黄は中和の色、自然の性にして、万世易はら

ず」と。又云ふ、「美なる者上に在るは、皇帝、始めて法度を制して、道の中を得、万世易はらず。後世、聖と雖も、能く与に同じきもの莫ければなり」（論篇）と。『通典』（卷百四、皇帝諡号議）の注に云ふ、「黄は中和の美色なり。黄は天徳を承け、最盛にして淳美なり」と。『易』（坤六五）文言に、「君子は黄中にして通理、正位にして体に居り、美は其の中に在りて、四肢に暢び、事業に発す。美の至りなり」と。所云る「美は其の中に在り」とは、正に黄の中を謂ふ。董の此の言は蓋し『易』の義に本づきしならん。

⑦言ふところは、王道に於いて欠くる有るなり。○官本に云ふ、「他本『則』の下に、『可』の字を衍す」と。

⑧盧云ふ、「本亦『兼受』に作る。地能く持載し、又能く容納するを謂ふ。義亦通ず可し」（『春秋繁露注』）と。

〈本文通釈〉

深く「王」という「号」の大意を探求するに、この概念は五科（の外延）を有する。「皇」「方」「匡」「黄」「往」の各科である。この五科を総合して一言して「王」というのである。（そこで「王」とは「皇」なるもの、「方」なるもの、「匡」なるもの、「黄」なるもの、「往」なるものである。従つて、「王」の意義が、世界にあまねく行きわたつて「皇」（おおいなるもの）でない（とみなされている）ようであれば、その治世は正しくのびやかで「方」（正しいもの）ではなくなる。治世が正しくのびやかで「方」はなくなれば、（王の）徳は「匡」（み）ちめぐつてあまねく行きわたることができなくなる。（王の）徳が「匡」ちめぐつてあまねく行きわたることができなくなれば、（王の）美は（五色の中心の）「黄」（最も麗しい色）でなくなる。（王の）美が「黄」でなくなれば、（王は徳化は）四方へと進み「往」くことができなくなれば、王道において欠

落したものととなる。そこで（世に）「天は覆うこと果てしなく、地は載せるものすべて愛する。風は天の令を具現（するもの）として（吹き）、天の威力に（事物を）集中させ、雨はあまねく施して、天の徳を均等に歩きわたらせる」というのは、王のあり方を述べているのである。

第三節

〈本文〉

深く君号の大意を察するに、其の中に亦五科有り。元科・原料・権科・温科・群科、此の五科を合して、以て一言にして之を君と謂ふ。君は元なり。君は原なり。① 君は権なり。君は温なり。君は群なり。是の故に君意は元に比せざれば、則ち動きて本を失ひ、② 動きて本を失すれば、則ち為す所立たず。為す所立たざれば、則ち原に効はず。③ 原に効はざれば、則ち自ら委舎す。④ 自ら委舎すれば、則ち化行はれず。権を爰に用ふれば、則ち中適の宜を失す。⑤ 中適の宜を失すれば、則ち道平らかならず、徳温ならず。道平らかならず、徳温ならざれば、則ち衆、親安せず。衆、親安せざれば、則ち離散して群せず。離散して群せざれば、則ち君に全からず。⑥

〈義証〉

- ① 官本に他本此の四字を欠く。
- ② 対冊に云ふ、「春秋は一を謂ひて元と為す。始めを大とするを視して本を正さんと欲するなり」と。
- ③ 本書玉英篇に、「元は猶ほ原のごときなり。其の義は以て天地の終始に随ふなり」と。案するに、原・元は一義にして分別して之を言ふは、元は是れ本を正すの義にして、原は是れ息まざるの義なり。故に下に「自ら委舎す」と。

④ 盧云ふ、『委舎』とは即ち『委卸』なり」（『春秋繁露注』）と。

⑤ 経の及ばざる所は、則ち権を以て之を平らかにす。是れ権も亦中なり。若し権を行ふを以て変を濟ふと為せば、則ち必ず中を失するに至らん。盧云ふ、「用権於變」(権を變に用ふ)の上に脱文有らん」(『春秋繁露注』)と。

⑥ 上の文を以て之を例するに、此の処、文末未完ならず。玉英篇の「是の故に国を治るの端は、名を正すに在り。名の正しければ、五世を興す。五伝の外、美惡乃ち形はる。其の真を得と謂ふ可し。子路の能く見る所に非るなり」の三十六字、当に本篇の錯簡と為すべし。或いは即ち是れ此の処の文ならん。

〈本文通釈〉

深く「君」という「号」の大意を探求するに、この概念もまた五科(の外延)を有する。「元」「原」「權」「溫」「群」の各科である。この五科を総合して一言して「君」というのである。(そこで「君」とは「元」なるもの、「原」なるもの、「權」なるもの、「溫」なるもの、「群」なるものである。従つて、君主が「元」(事物の根源)に基準を求めらなければ、その行動は根本を見失つてしまふ。その行動が根本を見失つてしまえば、為すところは確かなものとはならない。為すところが確かなものとならなければ、「原」(根源の永続性)に做うことがなくなつてしまふ。「原」に做うことがなくなつてしまえば、自らを遺棄することになる。自らを遺棄してしまえば、教化は行われなくなる。(以下に脱文があると考えられる。)
 「權」(原則から離れた臨機応變の対応)を非常事態に用いれば、中庸適正を見失つてしまふ。中庸適正を見失つてしまえば、その治世は不公平なものとなり、その徳は「溫」(溫和)でなくなつてしまふ。治世が不公平となり、徳が「溫」でなくなつてしまえば、民衆は親しみ安らがなくなくなる。民衆が親しみ安らくなければ、(民衆は)バラバラで「群」(秩序ある社会)を形成しなくなる。(民衆

が)バラバラで「群」を形成しなくなれば、君道において欠落したものとなる。

第四節

〈本文〉

名は真より生ず。① 其の真に非ざれば、以て名と為さず。名は聖人の物を真にする所以なり。② 名の言為る真なり。③ 故に凡百の譏に黜な黜たる者有るも、各々其の真に反れば、則ち黜黜たる者還つて昭昭たるのみ。④ 曲直を審らかにせんと欲すれば、繩を引くに如くは莫し。⑤ 是非を審かにせんと欲すれば、名を引くに如くは莫し。名は是非に審かなるや、猶ほ繩の曲直に審かなるがごときなり。其の名実を詰ひ、其の離合を觀れば、則ち是非の情、以て相調ふ可からざるのみ。⑥

今の世、性に闇くして、之を言ふ者同じからず。胡んぞ試みに性の名に反らざる。性の名は生に非ずや。⑦ 其の性の自然の資の如き、之を性と謂ふ。⑧ 性は質なり。⑨ 性の質を善の名に詰ひて、能く之に中たるや。⑩ 既に中たる能はず。而も尚ほ之を質は善なりと謂ふは、何ぞや。性の名は質を離るるを得ず。質を離るること毛の如ければ、則ち性に非ざるのみ。察せざる可からざるなり。⑪ 春秋は物の理を弁じて、以て其の名を正す。物に名づけて其の真の如くすること、秋毫の末を失せず。故に寶石に名づくるには、則ち其の五を後にし、退鵠を言ふには、則ち其の六を先にす。聖人の正名に謹むこと此くの如し。君子の其の言に於ける、苟もする所無きのみ。⑫ 五石・六鵠の辭、是なり。⑬ 衆惡を内に柅きめて、外に発するを得しめざる者は心なり。⑭ 故に心の名為る柅きなり。人の氣を受くる、苟も惡無き者ならば、心何をか柅きめんや。⑮ 吾、心の名を以て、人の誠を得たり。⑯ 人の誠に、貪有り、仁有り。仁・貪の氣、兩つながら身に在り。⑰ 身の名は、諸を天に取る。天、兩つながら陰陽の施を有し、身も亦兩つながら貪仁の性を有す。

天に陰陽の禁有りて、身に情欲の枉有るは、天道と一なり。^⑱ 是を以て陰の行は春夏を干すを得ずして、月の魄は常に日光を厭ひ、乍ち全く乍ち傷つく。^⑲ 天の陰を禁すること此くの如し。安くんぞ其の欲を損して其の情を輟めて以て天に応ぜざるを得ん。天の禁する所にして身之を禁ず。故に曰く、身は猶ほ天のごとし、と。^⑳ 天の禁する所を禁ず。天を禁するに非ざるなり。^㉑ 必ず情欲（もと「天性」に作る。『義証』によつて改める）の教へに乗らざれば、終ひに枉むる能はざるを知る。^㉒ 実以て名と為すを察すれば、教へ無きの時、性何ぞ遠かに是くの若くならん。^㉓ 故に性は禾に比へ、善は米に比ふ。米は禾中より出づるも、而も禾未だ全くは米と為る可からざるなり。善は性中より出づるも、而も性未だ全くは善と為る可からざるなり。^㉔ 善と米と、人の天を繼いで外に成す所にして、天の為す所の内に在るに非ざるなり。^㉕ 天の為す所は、至る所有りて止む。^㉖ 之を内に止むる、之を天性と謂ふ。^㉗ 之を外に止むる、之を人事と謂ふ。^㉘ 事は性外に在るも、而も性は徳を成さざるを得ず。^㉙ 民の号は、之を暝に取るなり。使し性にして已に善ならば、則ち何の故に暝を以て号と為さん。暝を以て言ふは（もと「以實者言」に作る。『義証』によつて「以暝言者」に改める）^㉚ 扶將せざれば、則ち顛陥猖狂す。安くんぞ能く善ならん。^㉛ 性は目に似ること有り。目は幽に臥して暝り、^㉜ 覚むるを待ちて而る後に見ゆ。其の未だ覚めざるに当たりては、見るの質有りと謂ふ可きも、而も見ゆと謂ふ可からず。今、万民の性も、^㉝ 其の質有るも未だ覚むる能はず。譬へば暝る者覚むるを待つが如し。之に教へて然る後に善なり。其の未だ覚めざるに当たりては、善質有りと謂ふ可きも、而も善と謂ふ可からず。^㉞ 目の暝りて覚むると、一概の比なり。^㉟ 静心もて徐に之を察すれば、其の言、見る可し。性は暝りて未だ覚めざるが而くにして、^㊱ 天の為す所なり。天の為す所に効ひ、之が為に号を起す。故に之を民と謂ふ。民の言為る、固より猶ほ暝のごとし。^㊲ 其の名号に

随ひて以て其の理に入れば、則ち之を得ん。是れ名号なる者を天地に正すなり。天地の生ずる所、之を性情と謂ふ。^㊳ 性情は相与に一つの暝と為す。情も亦性なり。性已に善なりと謂へば、其の情を奈何せん。^㊴ 故に聖人は性を善なりと謂ひて其の名を累すること莫し。^㊵ 身の性情有るは、天の陰陽有るが若きなり。人の質を言ひて其の情無きは、猶ほ天の陽を言ひて其の陰無きがごときなり。^㊶ 論に窮する者は、受くる無に時きなり。^㊷ 性に名づくるに、上を以てせず、下を以てせず。其の中を以て之に名づく。^㊸ 性は繭の如し卵の如し。卵は覆を待ちて雛と成り、^㊹ 繭は繚を待ちて糸と為り、性は教へを待ちて善と為る。此を之れ天を真にすと謂ふ。^㊺ 天、民の性を生じて善質有らしむるも、而も未だ善なる能はず。^㊻ 是に於いて之が為に王を立てて以て之を善にす。此れ天意なり。^㊼ 民、未だ善なる能はざるの性を天に受けて、退きて性を成すの教へを王に受く。王は天意を承けて、民の性を成すを以て任と為す者なり。^㊽ 今、其の眞質を案じて、而も民の性已に善と言ふは、是れ天意を失して王の任を去るなり。万民の性、苟も已に善ならば、則ち王者命を受けて尚ほ何を任とせんや。^㊾ 其の名を設くること正しからず。故に重任を棄てて天（「天」もと「大」に作る。『義証』によつて改める）大命に違ひ、法言を非るなり。^㊿ 春秋の辞、内事の外に待つ者は、外より之を言ふ。^① 今、万民の性、外教を待ちて然る後に能く善なり。善当に教へに与るべく、当に性に与るべからず。^② 性に与れば、則ち累多くして精ならず、^③ 自ら功を成して賢聖を無みす。此れ世の長者の誤つて出す所なり。春秋の辞を為すの術に非ざるなり。^④ 不法の言・無験の説は、君子の外にする所なり。何を以て為さんや。^⑤ 或ひと曰く、「性に善端有り、心に善質有り、尚ほ安くんぞ善に非ざる」と。之に応へて曰く、「非なり。繭に糸有るも繭は糸に非ざるなり。卵に雛有るも卵は雛に非ざるなり。比類率ね然り。有何ぞ疑はんや」^⑥ 天、民を生じて大（「大」もと「六」に作る。『義証』引く

或説によつて改める) 経有り。⑤⑦ 性を言ふこと当に異なるべからず。然れども其の或ひと曰く、「性已に(「已」もと「也」に作る。『義証』によつて改める) 善なり」と。⑤⑧ 或ひと曰く、「性は未だ善ならず」と。則ち所謂の善なる者、各々意を異にするなり。性に善端有りて、童(もと「動」に作る。『義証』によつて改める)の父母を愛するも、⑤⑨ 禽獸より善なれば、則ち之を善と謂ふ、此れ孟子の善なり。⑥⑩ 三綱五紀に循ひ、⑥⑪ 八端の理に通じ、⑥⑫ 忠信にして博く愛し、敦厚にして礼を好みて、乃ち善と謂ふ可しとは、此れ聖人の善なり。是の故に孔子曰く、「善人は吾得て之を見るを得ず。常有る者を見るを得れば斯れ可なり」(『論語』述而篇)と。⑥⑬ 是によりて之を観れば、聖人の所謂の善は、未だ当たり易からざるなり。⑥⑭ 禽獸より善なれば則ち之を善と謂ふには非ざるなり。使し其の端を動かして禽獸より善なれば則ち之を善と謂はば、善人(「人」もと無し。『義証』によつて補う) 奚ぞ見えざと為さんや。⑥⑮ 夫れ禽獸より善なるの未だ善と為すを得ざるや、猶ほ草木より知にして知と名づくるを得ざるがごとし。⑥⑯ 万民の性は禽獸より善にして善と名づくる得ず。⑥⑰ (この一文を『義証』、衍とする) 善(「善」もと「知」に作る。『義証』によつて改める)の名は乃ち之を聖に取る。⑥⑱ 聖人の命づくる所は、天下以て正と為す。朝夕を正す者は北辰を見、嫌疑を正す者は聖人を視る。聖人以て王無きの世、教へざるの民は、能く善に当たる莫しと為す。⑥⑲ 善の当たり難き此くの如くにして、万民の性は皆能く之に当たると謂ふは過てり。⑦⑰ 万民の性は禽獸より善なるは之を許すも、⑦⑱ 聖人の所謂の善は許さず。吾が之が命性を質すこと孟子に異なれり。孟子は下は禽獸の為す所に質す。故に性已に善なりと曰ふ。吾上に聖人の為す所に質す。故に性は未だ善ならずと謂ふ。⑦⑲ 善は性に過ぎ、聖人は善に過ぐ。⑦⑳ 春秋は元を大とす。故に正名に謹む。名は始むる所に非ず。之を如何ぞ(もとここに「未善」の二字あり。『義証』によつて衍となす) 已に善なりと謂はんや。⑦㉑

〈義証〉

- ①〇天啓本、行を提げず。凌本同じ。
- ②『管子』心術篇に、「名は聖人の万物を紀す所以なり」と。『荀子』正名篇に、「名は実を累するを期する所以なり」と。
- ③先に物有りて而る後に名有り。形に象りて字を為し、声を弁じて以て物を紀す。其の繁に及ぶや、仮借する所多けれども、其の始めを原ぬれば、皆其の真を以てす。
- ④『説文』に、「黠」は桑の菴かみの黒き者なり(第十篇上)と。『広雅』(釈器)に、「黒なり」と。桑菴の黒に因りて引申して凡黒の称と為す。『説文』(第二篇上)口部に、「名」とは、自ら命するなり。口に从ひ夕に从ふ。夕は冥なり。冥くらくして相見えす。故に口を以て自ら名いふなり」と。案ずるに、「冥」も亦「黠」の義を取る。凌云ふ、「文選」注に、「声類」に曰く、「黠」は深黒の色なり(『春秋繁露注』)と。
- ⑤『礼(記)』経解に、「繩墨誠に陳すれば、欺くに曲直を以てす可からず」と。『荀子』勸学篇に、「木、繩を受くれば、則ち直し」と。
- ⑥名は実と相麗く。故に名実を詰とひて、義の離を為すと合を為すと見る可し。盧云ふ、「玉篇」(卷九)に「調」は落干・力但の二切。誣言、相加被するなり(『春秋繁露注』)と。輿案ずるに、天啓本「調」の下に注に云ふ、「力但の切、誣言、相加ふ」と。案ずるに、『説文』(第三篇上)に、「調」は詆調なり」と。『類篇』(卷七)引いて「抵」に作る。又云ふ、「詆調は誣言なり」(同上)と。『漢書』文三王伝に、「王陽、詆調せらる」と。顔注に、「誣諱なり」と。(『漢書』)谷永伝に、「災異を末殺せんと欲して、満調して天を誣ふ」と。此に「相調」と云ふは、猶ほ「相誣ふ」と言ふがごとし。「情」は猶ほ「実」のごときなり。○俞云ふ、「此の下当に『春秋弁物之理』(春秋は物の理を弁す)より『五石六鶴之辞是也』(五石六鶴の辞、是なり)までの六十三字を接ぐべし。下に脱簡有りて、玉英篇に在り。其の文に曰く、『是故治之端在正名』

（是の故に治の端は正名に在り）より『非子路之所能見』（子路の能く見る所に非ず）に至るまでの三十六字なり。深察名号篇は此に至り已に畢はる。篇首に云ふ、『天下を治るの端は、弁大を審らかにするに在り。弁大の端は、深く名号を察するに在り』と。末に云ふ、『是の故に治国の端は正名に在り』と。首末正に相応するなり。今其の文を定めて当に、『其の名実を詰ひて、其の離合を觀れば、則ち是非の情、相調ふ可からざるのみ。春秋は物の理を弁じて、以て其の名を正す。物に名づくるに其の真の如くして、秋毫の末を失せず。故に寶石に名づくれば、則ち其の五を後にし、退鶴を言へば、則ち其の六を先にす。聖人の正名に謹むや此くの如し。君子の其の言に於けるや、苟もする所母きのみ。五石・六鶴の辞、是なり。是の故に治国の端は正名に在り。名の正しきは五世を興し、五伝の外、美惡乃ち形る。其の真を得と謂ふ可し。子路の能く見る所に非ず』と云ふべし（『春秋繁露平議』一一）と。

⑦此れ字形を以て之を言ふ。「性」は「生」に从ふを以てなり。『論語』公冶長の皇（侃）疏に、「性は生なり」と。（『礼記』樂記篇鄭注に、「生の言たる生なり」と。古、亦通用す。『周礼』大司徒に、「五土の物を生を弁ず」と。（漢）杜子春「生」を讀んで「性」と為す（『周礼』同条鄭注所引）。『大戴礼』（勸学篇）に、「君子の性、異なるに非ず」と。『荀子』勸学篇、「性」を「生」に作る。（『戦国策』秦策（下）に、「生命寿長なり」と。『史記』范雎伝、「生」を「性」に作る。『莊子』達生篇に、「生に達するの情は、生の以て為す無き所に務めず」と。『淮南』（泰族訓）、「生」を「性」に作る。又、『莊子』徳充符に、「幸ひに能く生を正しくするもののみ、以て衆生を正す」と。「生を正す」は「性を正す」を謂ふなり。大宗師篇に、「相道に造（もと）遺」に作る。原典によつて改めるる者は事とする無くして生定まる」と。「生定まる」とは、「性定まる」を謂ふなり。『晏子春秋』問上に、「地は生を同じくせず」と。「性」を同じくせざるを謂ふなり。皆借字にして、此の類甚

だ多し。

⑧『莊子』庚桑楚及び『孝經緯』皆性を以て生の質と為す。而して『莊子』則陽篇、生まれながらにして美なる者を以て聖人の人を愛するの性に喩ふるは、尤も此の旨と適合す。蓋し莊も亦性善を主とするなり。告子云ふ、「生を之れ性と謂ふ」（『孟子』告子上）と。『荀子』正名篇に、「生の然る所以の者之を性と謂ふ。生の和の生ずる所、精合し感応じて、事とせずして自づから然る之を性と謂ふ」と。『白虎通』性情篇に、「性は生なり」と。韓愈云ふ、「性は生と俱に生ず」（『原性』）と。並んで之と同じ。朱子云ふ、「性は人の天の理に得る所にして、生は人の天の氣に得る所なり」（『孟子』告子篇注）と。伊川も亦云ふ、「性は即ち理なり」と（『二程全書』卷十九・二十四）。理と氣と分ちて二と為すに因りて、始めて生と性とを分ちて二と為す。故に又云ふ、「人の性は善なりと言ふは、性の本なり。生を之れ性と謂ふは、其の稟くる所を論ずるなり。孔子「性相近し」と言ふ（『論語』陽貨篇）。若し其の本を論ずれば、豈に相近しとす可けんや。只其の稟くる所を論ずるのみなり（同上、卷十九）」と。又云ふ、「生を之れ性と謂ふとは、止だ稟受する所を訓ずるのみなり。天命を之れ性謂ふとは、此れ性の理を謂ふなり」（同上卷二十七）と。明道則ち云ふ、「生を之れ性と謂ふとは、性は即ち氣、氣は即ち性に於て、生を之れ謂ふ」（同上、卷一）と。言ふ所、此と合ふ。

⑨此れ字義を以て言ふ。宋儒の所謂る氣質の性は此に本づく。『礼（記）』学記に、「民に血氣、心知の性有り」と。「血氣、心知」とは、其の質なり。『孝經』鈞命決に、「性は、生の質なり。（此の語は鄭君取りて『中庸』の「天命を之れ性と謂ふ」に注す。）木の性の若きは則ち仁なり。金の性の性は則ち義なり。火の性は則ち礼なり。水の性は則ち智なり」と。荀子云ふ、「情は性の質なり」（『荀子』正名篇）と。『国語』齊語（第二章）、韋（昭）注に、「質は、性なり」と。案ずるに、董は性情を謂ひて一暎と為す。苟は性を以て惡と為す。故に情を以て性の質と為す。

知らず、性も亦質なるを。『孝經』（喪親章）に云ふ、「毀つも性を滅せず」と。

⑩「中」は猶ほ「合」のごときなり。

⑪「毛の如し」とは其の微を言ふ。言ふところは、略しく質を離るれば、則ち性に非ざるなり。蓋し所謂性は、専ら氣質に就きて言ふ。○兪云ふ、「此の下に當に『枉衆惡於内』（衆惡を内に枉む）云々を接ぐべし。此より以下は、即ち実性上篇なり。董子、性を論じて、必ず反つて諸を性の名に求む。故に曰く、『性の名は生に非ずや』と。心を論じて反つて諸を心の名に求む。故に曰く、『心の名爲る、枉なり』と。蓋し古人、義理を言ひて、声音を離れて訓詁せざるは、即ち孔子の正名の義なり。実性篇と深察名号篇と相次ぐ所以なり。後人、兩篇の文に相近き者有るに因りて、遂に篇首の『今の世、性に闇し』云々を將て誤つて深察名号篇の『春秋は物の理を弁ず』の一節の上に雇入して、兩篇遂に分かつ可からず。今此を定めて実性上篇と爲して、『孔子曰く、名正からざれば、言順はれず』以下は、則ち実性下篇と爲せば、董子の旧を失せざるに庶からんか』（『春秋繁露平議』二）と。輿案するに、『荀子』正名篇も亦性情を言へば、則ち此れ深察名号篇中に在るも誤らず。但だ文に錯簡有るのみ。実性篇中に此と複すること多きは、疑ふらくは後人の綴輯に出づればなり。兪、分ちて上下篇と爲すは、未だ当たらざるに似たるなり。

⑫莊十年（十一年の誤）、「譚子、莒に奔る」と。（『公羊』伝）に、「國、已に滅ぶ。出づる所無きなり」と。何注に、「國を有して出奔する者に別つ。孔子曰く、『君子の其の言に於ける、苟もする所無きのみ』と。

⑬僖十六年『穀梁伝』に、「君子の物に於ける、苟もする所無きのみ。石すら且つ猶ほ其の辞を尽くす。而るを況や人に於けるをや。故に五石・六鵠の辞、設けざれば、則ち王道元がらず」と。此の義、之と合ふ。蓋し師說同じきなり。孔叢子に、「平原君曰く、『至精の説、得て聞く可

きか』と。答へて曰く、『其の説皆之を経伝に取り、敢へて意を以てせず。』春秋、六鵠退飛するを記し、之を覩れば則ち六、之を察すれば則ち鵠なり」と。

⑭盧云ふ、『枉』、『説文』、『集』に作る。如甚の切、弱の兒なり。蓋し、惡強ければ、肆、外に見はる。故に之を駟らして暴なる無からしむ。即ち下に、『其の欲を損し、其の情を輟む』と云ふ者、是なり（『春秋繁露注』）と。兪云ふ、『王（道焜）本注に云ふ、『枉』、疑ふらくは『枉』ならん。如甚の切、『棚』なり』と。然れども『枉』は『棚』に訓せず。『説文』木部に、『桀』は弱の貌なり』と。則ち『棚』は仍ほ『枉』の字の訓のみ。其の旨に非ざるなり。今案するに、『枉』は衣の『襟』なり。『襟』に禁禦の義有り。『積名』積衣服に、『襟』は『禁』なり。前に交はり、風寒を禁禦する所以なり』と。『枉』に亦任制の義有り。『積名』積喪制に、『小要』は又之を『枉』と謂ふ。『枉』は『任』なり。際會を任制して解けざらしむるなり』と。任制と禁禦と、其の義相通ず。衆惡を内に枉めて、外に発するを得しめず』とは、正に任制の義に取る。下文に曰く、『天に陰陽の禁有り、人に情慾の枉有り』と。『枉』・『禁』は文を対す。然れば、則ち『枉』は即ち『禁』なり。亦猶ほ『枉』は即ち『襟』なり。原注の訓ずる所は、未だ其の旨に達せず』（『春秋繁露平議』二）と。輿案するに、天啓本注に、『枉』、疑ふらくは『襟』ならん。如甚の切、『棚』なり』と云ふは、案ずるに、『棚』は當に『弱』と爲すべし。『淮南』詮言訓注に、『枉』は柔弱なり』と。

⑮此れ声を以て之を言ふ。「心」は、息林の切。「枉」は、如甚の切。古音同じく「七」部に在り。「白虎通」性情篇に、「心の言爲る任なり。思ひに任ずるなり」と。「広雅」釈親に、「心は任なり」と。「任」「枉」は亦同声の字なり。言ふところは、性に固より善質有り、而して氣を受くること未だ嘗て惡無くんばあらず。其の卒ひに能く之を枉むる者は、則ち仍ほ善質之を爲す。子曰く、『苟も仁に志せば、惡しきこと無し』

〔論語〕里仁」と。悪は聖人の諱む所なり。但だ荀(子)、偏に性を以て悪と為すは、則ち之を失するのみ。

⑩「誠」は猶ほ「実」のごときなり。言ふところは、名に因りて以て其の實を得るなり。

⑪「氣」は即ち質なり。仁は善にして貪は悪なり。此れ善悪皆身に具はり、悪有りて善無きを謂ふに非ざるなり。『論衡』本性篇に云ふ、「周人世碩以為へらく、人の性に善有り悪有り。人の善性を挙げて養ひて之を致せば、則ち善長じ、性の悪をば養ひて之を致せば、則ち悪長ず。此くの如くんば、則ち情性各々陰陽有りて、善悪養ふ所に在り、と。『養書』一篇を作る。宓子賤・漆雕開・公孫尼子の徒、亦情性を論じて、世子と相出入す。皆性に善有り悪有るを言ふ」と。董の旨、蓋し之と近し。孔子言へり、「性は近く習ひ遠し」と。相近しとは、亦性兩つながら仁・貪の氣を有するを以て、稟くる所齊しからず、但だ相近きのみ。故に朱子以為へらく、氣質を兼ねて言ふ、と(『論語』陽貨篇「性相近」条注)。是れ董説、孔子と合ふなり。程子則ち謂へり、「孔子は性の本を言ふに非ず。豈に聖人の言にして独り其の本を遺す者有らんや」と。(『黄震云ふ、「性を言ふの説は、本朝に至りて精なり。善なる者を以て天地の性と為し、善を尽くす能はざる者を以て氣質の性と為す。此の説既に出て、始めて孟子の性善の説を完うするに足る。世の学者、乃ち此に因りて陰かに吾が夫子の説を陋とするも、敢へて非を明言せず。則ち性相近し(『論語』陽貨篇)は是れ氣質を指して言ふと曰ふは、曲げて之が為に回護する者の若し。則ち孟子の性を言ふこと何ぞ其れ精にして、夫子の性を言ふこと何ぞ其れ粗なるや。竊かに意へらく、天命を之れ性と謂ふ、所謂天地の性は、是天命流行の初めを推して言ふなり。性の従りて来る所を推すなり。所謂氣質の性は是れ既に諸を人に属するを指して言ふなり。斯ち其の之を性と謂ふ者なり。夫子の性を言ふは亦此を指すのみ。本朝の性を言ふは、特だに孟子の性善の説に因るのみ。之を人に

撥りて尽くは合ふ能はず。故に其の已上の者に推測して、以て其の義を完くするのみ。性を言ふこと豈に夫子の一語に加ふる有らんや(『黄氏日抄』卷二、読論語)と。案ずるに、黄氏は亦調停の説なり。荀子、偏に性悪を言ひ、董と科を異にす。而して後人同じく董荀と称するは、其の実に非ざらん。司馬光の『性弁』に、「孟子以へらく、仁義礼治は皆性に出づる者なりと。知らず、暴慢食惑皆性に出るを」と。又揚子(『法言』修身篇に云ふ、「人の性や、善悪混ず。其の善を修むれば、則ち善人と為り、其の悪を修むれば、則ち悪人と為る」と。司馬光注して亦云ふ、「孟は以て性は善にして、其の不善なる者は外物之を誘ふと為すなり。荀は以へらく、人の性は悪にして、其の善なる者は聖人之を教ふるなりと。是れ皆其の偏を得て、其の本質を忘る。性は人の天より受けて以て生ずる所にして、善と悪とは必ず兼ねて之を有す。猶ほ陰の陽に与けるがごときなり。是の故に聖人と雖も、悪無きこと能はず。愚人と雖も、善無きこと能はず。其の受くる所の多少の間、則ち殊なるのみ。必ず、聖人に悪無しと曰へば、則ち安くにか学を用ひん。必ず愚人に善無しと曰へば、則ち安くにか教へを用ひん。之を田に譬ふれば、稲梁も藜秀も、相与に並び生ず。善く田を治むる者は其の藜秀を薈(耨の誤)し、善く田を治めざる者は之に反す。揚子以へらく、人の性は善悪混ずと。混ずとは善悪心に雜処するの謂ひなり。人の扱びて養ふ所の如何を顧みるのみ」と。当に董説を用ふ。程子、孟子の性善を言ふを宗びて云ふ、「性は不善なし。而して不善有るは才なり。性は即是れ理、理は則ち堯舜より塗人に至るまで一なり。才は氣に稟く。氣に混濁有り。其の清き者を稟くれば賢と為り、其の濁れる者を稟くれば愚と為る。」(『全書』卷十九)「学んで之を知れば、則ち氣清濁と無く、皆善に至り性の本に復す可し。湯武の之を身づからする、是なり。孔子言ふ所の下愚は移らずとは、則ち自暴自棄の人なり(同上卷二十四)と。又曰く、「人は氣稟に生まれ、理に善悪有り。然れども是れ性中に元此の兩物の

相對して生ずること有るにあらず。幼きよりして善なる有り、幼きよりして悪なる有り。是れ氣稟の自（「自」もと「有」に作る。原典に従つて改める）然なり。善は固より性なり。然れども悪も亦之を性と謂はざる可からず」（同上卷一）と。又云ふ、「天下の善悪は皆天理なり。之を悪と謂ふは、本より悪なるに非ず。但だ或いは過不及して便ち此くの如し」（同上卷二）と。輿案するに、程の「氣に清濁有り」と云ふは、此に所云る「仁貪の氣、兩つながら身に存す」にして、所云る「悪も亦之を性と謂はざる可からず」は、尤も本篇と照合す。但だ添へて理の字を出して、性の本を以て性善を詮して、理を言ひて又反つて之を有生以前に求む。故に程子又云ふ、「人生まれ静なる以上は容に説くべからず。才かに性を説くの時、便ち已に是れ性ならず」（同上卷一）と。其の説の窮するを救ふ所以なり。然れども理は善にして性に善悪有りと言ふの直捷為るに如かず。張子も亦云ふ、「形ありて而かる後に氣質の性有り。善反れば、則ち天地の性存す。氣質の性は、君子に性とする勿き者有り」（「正蒙」誠明篇）と。夫れ善は是れに反るなり。性とすること有ると「性とする勿き」こと有ると分別して二と為すは、理通じ難きに似たり。若し善は是れ天地の性にして、一たび人の形を成して即ち氣質の善悪の雜はる有れば、又何ぞ必ずしも人の性は善なりと言はんや。程子、王介甫の「物の性に因りて之を生ずるは直にして内の敬なり」に駁して云ふ、「是れ物は先に性有つて、然る後に坤因りて之を生ずるとして可ならんか」（『全書』卷二）と。案するに、張子の言の如き、是れ性に先に性有りとして其れ可ならんか。朱子云ふ、「氣質の稟くる所は不善有りと雖も、性の本善を害せず」（『孟子章句』告子篇上）と。正に所謂る「仁貪兩つながら備ふ」にして、但だ氣質と性とを離けて之を二とするのみ。又云ふ、「性は本より善なりと雖も、省察矯揉の功無かる可からず」（同上）と。「矯揉」の二字は、荀の「鬻括丞矯」（『荀子』性惡篇）を取る。「矯揉」と云へば、則ち性未だ全たからず、仍ほ重説と合ふを知る。其れ性

は生初に具はり、形有れば斯ち質有り。質有れば斯ち氣有り。氣質と性とを離ちて之を二とするは、説の日に紛たる所以なり。（王陽明以て無善無悪は性の体、善有り悪有るは性の用と為す（『伝習録』卷下）は、亦宋儒の性を二にするの説に因りて之を小変するなり。）鄭、礼運の「故に人は天地の徳なり」の數語に注して云ふ、「人は此の氣と性ととの純なるを兼ねるを言ふ」と。又「故に人は天地の心なり」の數語に注して云ふ、「此れ氣と性ととの効を兼ねるを言ふ」と。漢儒、性を論じて、皆兼ねて氣を言ふを見る可し。

⑩天道は陽を好みて陰を惡む。此に「陰陽の禁」と云ふは、蓋し陰を禁じて陽を干さしめざるを謂ふ。文の便のみ。情欲の惡を柅とどめて、善を傷はしめざれば、斯ち善勝つ。己を治むるの克を貴ぶ所以なり。阮元の『性命古訓』に「西伯戡黎」の「天性を虞らず」の鄭注を引きて謂ふ、「天性を度らず」と。又「召誥」を引きて云ふ、「性を節するは惟だ日に其れ過まん」と。之を解して云ふ、「性を度ると性を節すると同意なり。之に節度あらしむるを言ふ」と。又云ふ、「性中に味・色・声・臭・安佚の欲有り。是を以て必ず当に之を節すべし」と。輿謂へらく、之を虞り之を節するは、正に此の性に仁貪有りの説と合ふ。其の情欲を柅むるは、正に之に節度あらしむるの実功なり。『易』に言ふ、「性を成す」（繫辭伝上）、「性を尽くす」（説卦伝）と。『詩』に言ふ「性を彌おほふ」（大雅、卷阿）と。『孟子』に言ふ、「性を忍ばず」（告子下）と。皆此の誼なり。

⑪凌云ふ、「月令疏に、『月は陰の精為り、日は陽の精為り。故に『周髀』（『髀』もと「含」に作る。原典によつて改める）に云ふ、日は猶ほ火のごとし。月は猶ほ水のごとし。火は則ち光を外にし、水は景を含む（「含」もと「髀」に作る。原典によつて改める）。故に月光は火の照らす所に生じ、魄は日の蔽する所に生ず。日に当たれば、則ち光盈ち、日に就けば、則ち光尽く』（『春秋繁露注』）と。○『黃氏日鈔』（卷五十

六、誦諸子、春秋繁露に「乍傷乍全」に作る。

⑳語は亦人副天數篇（第五十六）に見ゆ。

㉑天は陰を禁じて身は貪を禁ず。是れ天の當に禁ずべき所を禁ずることにして、自ら其の身を禁じ、之をして束縛せしむるに非ざるなり。故に曰く、「天を禁ずるに非ず」と。阿」と。○官本に云ふ、「他本『非』の下に『禁』の字無し」と。

㉒荀子云ふ、「枸木は必ず將に鑿括丞矯を待ちて然る後に直く。鈍金は必ず將に礪厲を待ちて然る後に利し。今、人の性は惡にして、必ず將に師法を待ちて然る後に正しく、礼義を得て然る後に治まる。今、人に師法無くば、則ち偏險にして正しからず。礼儀無くば、則ち悖乱して治まらず。古の聖人は人の性の惡なるを以て、以て偏險にして正しからず、悖乱して治まらずと為す。是を以て之が為に義理を起こし、法度を制して、以て世人の情性を矯めて之を正し、以て人を擾化して之を導くなり。始めて皆治に出で、道に合する者なり」（性惡篇）と。董・荀、性を言ふこと尽くは同じからざるも、而も政教を重んずるに帰するは則ち一なり。「天性」の二字は、疑ふらくは「情欲」の誤ならん。「天性」ならば、當に「性」と言ふべからず。

㉓盧云ふ、「旧本『性』の字の下に「禁天所禁非天也」の七字有り。条文に係因して衍す。本無き者是なり。「何遽」、旧本『何擲』に作る。下篇又「何処」に作る。皆訛てり。今、改正す」（春秋繁露注）。

㉔此れ、善の性中に出づるも、但だ未だ全からざるを言ふのみ。性は本惡にして、別に善を取りて以て之を矯むるを謂ふに非ず。荀子と異なる所由なり。本書、性善を言ふ者は多し。実性篇に云ふ、「性に善質有るも、而も善と為す能はざるなり」と。玉英篇に、「凡そ人の性、義を善とせざる莫し」と。又云ふ、「為して而も性を安んじ心を平らかにする者は、経礼なり」と。竹林篇に云ふ、「天の人の性命を為すや、仁義を行ひて恥ずべきを羞ぢしむ」と。又云ふ、「今、善を善とし惡を惡とし、

榮を好み辱を憎むは、人能く自ら生ずるに非ず。此れ天施の人に在る者なり」と。盟会要篇に云ふ、「天下（もこの下に「者」の字有り。同篇の義証によつて本来なかつたものとする）に患ひ無くして然る後に性、善にす可し」と。正貫篇に云ふ、「是れ其の天性の好む所を引きて、其の情の憎む所を圧ぐを知るなり」と。立元神に云ふ、「孝弟無くば、則ち其の生くる所以を忘る」と。皆性を以て善の微と為すなり。惟だ性に善端有り。故に教へ成り易く、惟だ善なるも而も全からず。故に教へに非れば可ならず。

㉕此に所謂る善は、成徳の謂ひなり。乃ち其の端の若きは、則ち天の内中に在り。故に繼いで成す。『易』に曰く、「之を繼ぐ者は善なり。之を成す者は性なり」（繫辭上）と。正に此の義に合す。○官本に云ふ、「他本、『在天』倒す」と。

㉖善の端有るのみ。

㉗○天啓本「天之性」に作る。案ずるに実性篇「性」の字無し。

㉘政教を謂ふ。

㉙人事は性外に在りと雖も、而も性中の善端有り。故に以て徳を成し易し。

㉚官本に云ふ、「他本『以實言者』に作る」と。興案するに、當に「以實言者」に作るべし。胡思敬云ふ、「實」を『瞑』に作り、『言』を下に属して読め」（典拠未詳）と。亦通す。

㉛○天啓本、「則」の字無し。凌本同じ。

㉜凌云ふ、「文選」李善注に、「瞑」は古の「眠」字なり」（春秋繁露注）と。

㉝○盧謂ふ、「今万民之字」の下、俗間本誤つて下文の『言無驗之説』より「故謹於正名、名非」に至るまでの四百六字を以て、『性』字の上隔つ」今官本に从ひて移正す」（春秋繁露注）と。

㉞○天啓本、「質」の上に「善」の字無し。凌本同じ。

③⑤ 『説文』(第三篇下)に、「敦は覚悟なり。教と門とに从ふ。門は尚ほ朦なり」と。『釈名』(卷三、釈姿容)に、「暝は泯なり。無知泯泯たるなり」と。案するに、「朦」「暝」は一義なり。程子「人の知識は、未だ嘗て全からずんばならず。其の蒙なるは猶ほ寐ぬるなり。呼んで之を覚まさば、斯ち蒙ならず」(『全書』卷四十一)と云ひ、又朱子の『論語』(学而篇)注の「人の性は皆善なり。而して覚むるに先後有り。後に覚むる者必ず先に覚むるの爲す所に効へば、乃ち以て善を明らかにして其の初めに復す可し」は、蓋し此に本づく。『賈子』(『新書』)先醒篇に、「懷王、賈君に問ひて曰く、『人、道を知る者を先生と謂ふは何ぞ』と。曰く、『先醒する爲めなり。世主未だ学ばざれば、饨饨然として猶ほ酔へるがごときなり。学問して倦まざれば、昭然として先に寤む。故に先醒と曰ふ』と。『韓詩外伝』六に、「問ふ者曰く、『古の道を知る者を先生と曰ふは何ぞ。猶ほ先醒と言ふがごときなり』と」。

③⑥ 盧云ふ、「而」「如」と通ず(『春秋繁露注』)と。

③⑦ ○官本に云ふ、「他本『猶』を誤つて『有』に作る」と。

③⑧ 為人者天篇(第四十一)に、「人の性情は、天に由る者有り」と。

③⑨ 『白虎通』性情篇に、「六情とは何をか謂ふや。喜怒哀樂愛惡を六情と謂ふ。扶けて五性を成す所以なり」と。『礼記』(中庸)疏に賀瑒を引きて云ふ、「性の情に於ける、猶ほ波の水に於けるがごとし。静かなる時は是れ水にして、動けば則ち是れ波なり。静かなる時は是れ性にして、動けば則ち是れ情なり」と。韓愈云ふ、「情は物に接して生ずるなり」(『原性』)と。程子云ふ、「或ひと問ふ、性は善にして情は不善かと。曰く、『情は性の動なり。之を正に帰するを要するのみ。亦何ぞ不善を以て之に名づくるを得んや』」(『全書』卷四十一)と。『孟子』(告子上)の「乃ち其の情の若きは、則ち以て善と爲す可し」の朱子注に云ふ、「情は性の動なり。人の情は本但だ以て善と爲す可くして、以て惡と爲す可からざれば、則ち性の本善なること知る可し」と。輿案するに、孟

子の意、惡人と雖も、而も以て善と爲す可きの情有り、是れ亦善なるを言ふ。以て惡と爲す可からざるを謂ふに非ず。其の「人に不善有ること無し」(告子上)と云ふは、不善有りと雖も、而も仍ほ皆善端有るを謂ふなり。若し性情皆惡と爲す可からずんば、惡何に於いてか起こらんや。此に「性情は一暝と爲す」と云ふは、是れ性と情と皆中に善質を含むも、而も情欲の発する所は、善に全からずして、教の以て之を継ぐこと有るに非れば、則ち善葆つ可からざるを謂ふ。性已に善と謂へば、則ち情も亦已に善なり。必ず然らず。「已」は、未だ文を對せざれば、情未だ善ならざる有るを知り、則ち性も亦未だ善ならざるを知る。亦性情皆惡なるを謂ふにも非ざるなり。荀子云ふ、「堯、舜に問ひて曰く、『人の情は何如ん』と。舜對へて曰く、『人の情は甚だ美ならず。又何ぞ問はん。妻子具はりて孝、親に衰へ、嗜欲得られて性、友に衰へ、爵祿盈ちて忠、君に滅ぶ。人の情か、甚だ美ならず。又何ぞ問はん』(性惡篇)と。荀は専ら情を以て惡と爲す。董説の周備するに如かず。程子又云ふ、「纒かに生識有りて便ち性有り。性有りて便ち情有り。性無くんば安くにか情を得ん」(『全書』卷十九)と。又云ふ、「人の性中は只だ四端有るのみ。又豈に許多の不善底の事有らんや。然れども水無くんば、安くにか波浪あるを得ん。性無くんば安くにか情を得ん」(同上)と。董説と合ふ。

④⑩ 「聖人」とは孔子を謂ふ。性善の説は孟子に始まる。

④⑪ 『白虎通』性情篇に、「性は陽の施なり。情は陰の化なり。故に『鈞命決』に曰く、『情は陰に生じて、欲、時を以て念ずるなり。性は陽に生じ、以て理に就く。』『説文』(第十篇下)に謂ふ、『情は人(もと)「天」に作る。原典によつて改める)の陰氣にして、欲有る者なり。性は人の陽氣の性にして、善なる者なり」と。『論衡』本性篇に、「仲舒、孫孟の書を覽、情性の説を作して曰く、『天の大経は一陰一陽。人の大経は一情一性。性は陽に生じ、情は陰に生ず。陰氣は鄙にして、陽氣は仁。性

は善なりと曰ふ者は、是れ其の陽を見るなり。惡と謂ふ者は是れ其の陰を見る者なり」と。仲舒の言の若きは、孟子は其の陽を見、孫卿は其の陰を見ると謂ふなり。二家各々見る有るを處はるは可なるも、人の情性を處らず。情性に善有り惡有るは未だしきなり。夫れ人の情性は同じく陰陽に生ず。其の陰陽に生ずる者は溼有り泊有り。玉は石に生じ、純有り駁有り。性情の陰陽に于ける、安くんぞ純善ならん。(語、疑ふらくは誤り有らん。)仲舒の言、未だ実を得る能はず」と。引く所の董説、今の書と異なる。充の意、以て性情に善有り惡有り、性は純善にして情は純惡に非ずと為す。案ずるに、陽尊陰卑篇(第四十三)に、「善の属は尽く陽と為す。惡の属は尽く陰と為す」と。固より陰陽を以て善惡に分かつ。此の篇、天陰を禁ずると人情欲を柅とむるを以て対して拏ぐ。是れまた陰を以て情に喩ふ。然れども又云ふ、「身は亦兩つながら仁貪の性有り」と。又云ふ、「性情は一瞑にして、情も亦性なり」と。則ち是れ性と情と同じく質より出で、情に貪欲有るを謂ふ。即ち性に仁有りて貪無きこと能はざるの証なり。猶ほ天の陽有りて即ち陰有るがごとし。情を以て截然として陰に属し善に属し、性をば截然として陽に属し善に属するに非ざるに似たり。充の云ふ所は未だ難しと為すに足らず。然れども董、性情に兩つながら貪仁有るを説きて、而も陰を以て情に喩ふるは、情欲の貪は見易く、性中の仁は顕らかにし難ければのみ。本性篇に又劉子政を引きて云ふ、「性は生まれながらにして然る者なり。身に在りて発せず。情は物に接して然る者なり。出でて外に形はる。外に形はるるは則ち之を陽と謂ひ、発せざる者は則ち之を陰と謂ふ」と。案ずるに、性を以て陰と為し、情を陽と為す。董と同じからず。而して陰陽を以て情性を言ふは、則ち董に本づく。

⑫此を以て論を窮むる者は、駁詰を受くる能はず。

⑬盧云ふ、「句を絶つ。本或いは『中民之性』に作りて、下に連ねて読む。下篇此くの如し。然れども此處は非なり」(『春秋繁露注』)と。興

案ずるに、天啓本誤らず。此れ適に孔子の旨に合ふ。所謂る「上智と下愚とは移らず」(『論語』陽貨篇)なり。(宋)劉原父(敞)の「公是先生弟子記」(卷四)に云ふ、「永叔問ひて曰く、『人の性は必ず善なり。然れば則ち孔子の所謂る上智と下愚も可なるか』と。劉子曰く、『可なり。智愚は善惡に非ざるなり』と。興謂へらく、原父の説、是なりと。然れども上智は天に得ること厚くして清ければ、則ち惡に墮せず。下愚は天に受くること薄くして昏ければ、則ち終に自ら善を絶つ。故に性に名づく可からず。上は教へを待たず、下は教ふ可からず。『賈子』(『新書』)連語篇に所謂る「材性上主は憂ふるに足らず。材性下の主は憂ひに勝ふ可からず。憂ふ可き者は惟だ中主のみなり」と。『礼(記)』中庸の孔疏に云ふ、「其の清氣の備はるを得る者は聖人と為り、其の濁氣の簡なる者を得る者は愚人と為る。降聖以下、愚人以上、稟くる所或いは多く、一と言ふ可からず。故に分けて九等と為す。孔子言ふ、『唯上智と下愚とは移らず』と。二者の外、逐物に移る。故に『論語』に『性相近し、習ひ相遠きなり』(陽貨篇)と云ふは、亦中人七等に擲るなり」と。『論衡』本性篇に云ふ、「孟軻、人の性を善と言ふは、中人以上の者なり。孫卿、人の性を惡と言ふは、中人以下の者なり。揚雄、人の性は善惡混ぜると言ふは、中人なり」と。韓愈の『原性』に云ふ、「性の品に上中下三有り。上なる者は善のみ。中なる者は導きて上下すべきなり。下なる者は惡のみ」と。蓋し即ち此に本づきて説を為す。下篇に云ふ、「聖人の性は、以て性に名づく可からず。斗筭の性も、又性に名づく可からず。性に名づくるは、中民の性なり」と。詞義尤も顕らかなり。『後漢書』楊終伝に云ふ、「上智下愚は之を移らずと謂ふ。中庸の民は要は教化に在り」と。(後漢、荀悦)『申鑒』政体篇に云ふ、「教化の廢るるや、中人を推して小人の域に墜とし、教化の行はるるや、中人を引きて君子の塗に納る」と。亦是れ此の義なり。

⑭○天啓本、「覆」を「復」に作る。凌本同じ。

⑤其の善を全たうするに迫るは則ち天に合す。故に云ふ、「真天」と。宋一新云ふ（典拠未詳）、「董子、陰陽五行を言ふに長じて、性を言ふに短なり。性は禾にして善は米なるを知り、亦禾の中に固より米有るを知るも、而も稂莠無きか。性の蘭の如く卵の如きを知り、亦糸の蘭中に在るを知るも、苟も糸無くんば、何ぞ蘭有らん。雖は卵の中に在るも、苟も卵無くんば、何ぞ雖有らんや。卵の雖と為す能はざる、蘭の糸と為す能はざるは、理なり。惟ふに性の惡と為す能はざるも、亦理なり。性と善と各々主名有れば、容に性を以て善と為すべからずと謂ふ。然れば則ち性と惡と亦各々主名有り、独り性を以て惡と為す可べけんや。物有れば必ず則有り（『詩經』大雅、烝民）。猶ほ蘭有れば必ず糸有り、卵有れば必ず雖有るがごときなり。之を継ぐ者は善にして、之を成す者は性なり（『易經』繫辭上）。人の性の善なるは、猶ほ水の下きに就く（『孟子』告子上）がごとし。聖賢の斤斤として弁を致す所以の者、曷ぞ嘗て性と善とを混じて一と為す。如し深く名号を察せんと欲すれば、則ち水は自づから下きに就く。即ち水を以て下しと為す可からずとて、容ぞ水の下きに就かずと謂ふを得んや。性は自づから皆善なり。即ち性を以て善と為す可からずとて、容ぞ性の本より善に非ずと謂ふを得んや。諸を蘭の自づから糸を出し、卵の自づから雖を出すに喩へんに、即ち蘭を以て糸と為し、卵を以て雖と為す可からずとて、容ぞ蘭は糸に始まるに非ず、卵は雖に始まるに非ずと謂ふを得んや。雖の種有りて然る後に卵を成し、糸の種有りて然る後に蘭を成す。善を継ぐこと有りて然る後に性を成す。是れ董子の言、反つて孔孟と相發明するが如くにして、又何ぞ疑ふ。且つ董子は陰陽五行に明るく、既に身に性情有るは猶ほ天の陰陽有るがごときを知るに、蓋ぞ亦陰は陽を助けて以て物を生み、陽の徳は固より生を主として殺を主とせざるを思はざる。性は皆は善ならずと謂ふは、是れ天地は物を生むを以て心と為さず必して而る後に可なり。天道、善ならざる無ければ、則ち天に稟けて以て性と為す者、安くんぞ善ならず

る有らん。董子は但だ善の性より出づるを知るも、而も性の実は善より出づるを知らず。已に顯かに繫辭と相悖り、乃ち漫りに善人に恒有るを援いて喩へと為す。善人は成徳の稱なり。豈に性善の謂ひならんや」と。案ずるに朱説は弁なり。但だ董は未だ嘗て性を以て惡と為さず。亦未だ嘗て以て性は皆は善ならずと為さず。但だ以て性は未だ全ては善ならず、而して善の端有り、教へを待ちて而る後に成ると為すのみ。卵の自ら雖と為る能はず、蘭の自ら糸と為る能はざるが如きのみ。苟の所謂る性惡と絶えて異なる。宋、董荀を以て同じく詆るは、蓋し誤つて劉向の「荀子」序を読めばなり。向の序に云ふ、「孟子は亦大儒にして、人の性は善なりと以へり。孫卿は孟子に後ること百余年なり。孫卿以て人の性を惡と為す。故に性惡の一篇を為して、以て孟子を非る。云々」と。下に又云ふ、「漢興るに至り、江都相董仲舒も亦大儒たり。書を作りて孫卿を美む」と。向の意に謂へらく、董先生、王道を言ひ、五伯を羞ずること孫卿と同じと。性惡の旨に闕せざるなり。性の惡と為す能はざるに至りては、此れ朱子の説にして、孟子の言はざる所なり。輿竊かに疑ひ有り。卵無ければ、則ち雖無し。糸無ければ、則ち蘭無し。性に善無ければ、則ち善を成す能はざるは、理なり。然して苟の性、惡と為す能はず。又何を以て惡有らんや。孟子、人の不善を為さしむ可きを以て、之を水を激するに比ふ（告子上）。又曰く、「桀の言を誦し、桀の行ひを行ふは、是桀のみ」（告子下）と。又曰く、「人の禽獸に異なる所以の者は幾ど希なり」（離婁下）と。又曰く、「之を操れば則ち存し、之を舍つれば則ち亡ぶ」（告子上）と。其の危ぶむこと此くの如し。今、性は惡を為す能はずと曰ふは、是れ人の修省を怠りて之をして自ら放にして、吾が性の自づから然るに任ずるも、固より惡を為す能はざるなりと曰はしめん。彼の治世長民の責有る者も亦且に民の性は固より惡を為す能はず。吾の教化政令を待つ無きなりと曰はん。又安くんぞ矯揉の説を取らんや。且つ董云ふ、「性は未だ全くは善ならず」と云ふも、未だ嘗て「性は以

て不善と為す可し」と云はざれば、則ち更に其の疑弁を用ふる所無し。蓋し其の孟と異なる者、善の分量に在りて、性の善惡に在らず。孟子言ふ、「惻隱羞惡恭敬是非の心は、人皆之有り」（告子上）と。又云ふ、「凡そ我に四端有る者、皆拈げて之を充たすを知る」（公孫丑上）と。所謂る「人皆之有り」とは、即ち人皆善の端有るを謂ふ。「拈げて之を充たす」とは、是れ即ち善に全からずして、己の拡充に待つこと有り。董、教へを待ちて善と為ると云ふと何ぞ異ならん。繫辭（上）の「善を繼ぐ」の語に至りては、董、前に原と相悖らざるを引く。善人成徳の稱は則ち董の自ら詮する所此くの如し。尤も相難するに足らず。『韓詩外伝』（卷五）に云ふ、「鹵の性は糸と為るも、女工の燔くに沸湯を以てし、其の統理を抽くを得ざれば、糸と成ならず。卵の性は雛と為るも、良雞の覆伏孚育すること積日累久なるを得ざれば、則ち雛と成ならず。夫れ人の性の善なる、明王聖主の扶攜して、之を内るるに道を以てせざれば、則ち君子と成ならず」と。又『淮南』秦族訓、此の數語を載せて亦大同なり。是れ董子の比喩は本古説なり。

④⑥此の語最も晰かなり。「未能」は人を勉ますの詞なり。

④⑦此れ董子の時の主に勧めて以て化を教くし俗を厚くせしむるの意なり。春秋より以來、王教、廢墜し、下に在るの君子、起ちて之を明らかにするも、而も其の力常に微なり。董生、教化の責を王に歸し、政教合一して其の化行ひ易からしむるを欲す。『管子』（正世篇）に云ふ、「君道立ちて然る後に下従ふ。下従ひて然る後に教へ立ちて化成る可し」と。亦此の意なり。

④⑧（第三次）対冊に云ふ、「天の令を之れ命と謂ふ。命は聖人に非れば行はれず。質僕を之れ性と謂ふ。性は教化に非れば成らず。人欲之を情と謂ふ。情は制度に非れば節せず。是の故に王者は上天意を承けて以て命に順ふに謹むなり。下は教化を民に明らかにして以て性を成すに務むるなり。法度の宜しきを正し、上下の序を別ちて、以て欲を防ぐな

り。此の三を修めて大本拳がる」と。○盧云ふ、「本或いは『以成民之善性為任也（民の善性を成すを以て任と為す）』に作る。今、大典本に従ふ」（春秋繁露注）と。

④⑨盧云ふ、「此の『也』は読んで『耶』と為す。本亦『矣』に作る」（同上）と。輿案するに、孟子は學を重んず。故に人の性は本と善にして皆堯舜と為る可しと謂ふ（告子下）。學者に歆動する所以なり。董子は政を重んず。故に人の性は未だ善なる能はず、王者を待ちて然る後に成ると謂ふ。君師と為る者に歆動する所以なり」と。孟子生きて戦国に当たり、人心陷溺已だ深く、上に明王に冀ふ所無し。故に詞を立つること同じからざるも、而も世を扶くるの心は異ならず。

⑤⑩「大」疑ふらくは「天」に作りしかと。

⑤⑪夷伯の廟は内事にして、雷を待ちて而る後に震いふは、則ち先に震ふを書して以て外の詞を起こし（僖公十五年九月『春秋』、「己卯、晦、震夷伯之廟」。『公羊伝』、「震之者何。雷電擊夷伯之廟者也。」）、宋の蟻有るは内事にして、雨を待ちて而る後に墜いふは、則ち先に雨を書して以て外の詞を起こす（文公三年『春秋』「雨蝻于宋」。『公羊伝』、「雨蝻者何。死而墜也」）が如きは皆其の例なり。

⑤⑫性の人事に関はらざるは必ずしも弁せず。善の教へに与るを以てすれば、則ち教へある者は奮ひて教へ無き者は危ふきを知る。

⑤⑬名を設くれば累多きを謂ふ。

⑤⑭凌云ふ、「韓子曰く、『厚重にして日に尊き、之を長者と謂ふ』（『韓非子』詭使篇）」と。○官本に云ふ、「『者』他本『古』に作る」（『春秋繁露注』）と。

⑤⑮『荀子』正名篇に、「無稽の言、不見の行、不聞の謀は、君子之を慎む」と。○官本に云ふ、「他本、末行の『所始如之何』の十一字を『不法』の下に接ぐ」と。

⑤⑯「有」は「又」に同じ。

⑤⑦疑ふらくは誤字有らんと。或云ふ、「六」当に「大」と為すべし」と。
 ⑤⑧「也」は蓋し「己」の誤ならん。董の意、性善性悪に在らずして、己に善未だ善ならずの判に在り。若し性と善と対して拏ぐれば、則ち下当に「性は善ならざる」と云ふべし。
 ⑤⑨「動」、疑ふらくは「童」に作りしかと。『孟子』に、「孩提の童も其の親を愛するを知らざる無し」(盡心上)と。
 ⑥⑩○天啓本、「言」に作る。凌本同じ。
 ⑥⑪『白虎通』号篇に、「古の時、未だ三綱六紀有らず」と。又綱紀篇に、「三綱とは何ぞ。君臣・父子・夫婦なり。六紀とは諸父・兄弟・族人・諸舅・師長・朋友を謂ふなり。故に含文嘉に曰く、『君を臣の綱と為す。父を子の綱と為す。夫を妻の綱と為す』と。又曰く『諸父兄を敬ふ。諸父に善有り。諸舅に義有り。族人に序有り。昆弟に親有り。師長に尊有り。朋友に旧有り』と。何をか綱紀と謂ふ。綱は張なり。紀は理なり。大なる者を綱と為し、小なる者を紀と為す。理を上下に張り、人道を整齊する所以なり。人皆五常の性を懷き、親を愛するの心有り。是を以て綱紀を以て化を為すこと、羅網の紀綱を有して万目張るが若きなり。『詩』に云ふ、『齊聲たる文王、四方を綱紀す』(棫樸)と。又云ふ、『六紀を三綱の紀と為す者なり』(綱紀篇)と。案するに、「三綱」は又本書基義篇(第五十三)に見ゆ。『太玄(経)』に云ふ、「三綱、中極に得」と。『漢(書)』谷永伝に、「三綱の蔽に勤む(勤もと動に作る。原典によつて改める)」と。蓋し此に本づく。「五紀」とは、『白虎通』に拠るに本「六紀」に作りしならん。然れども『莊子』盜跖篇に云ふ、『子張曰く、『子、行ひを為めざれば、即ち將に疏戚倫無く、貴賤義無く、長幼序無く、五紀六位將た何を以て利せんや』と。則ち古人に亦自づから五紀の称有り。『周語(中)』に『五義は宜を紀す』と。韋(昭)注に、『五義は父の義、母の慈、兄の友、弟の恭、子の孝なり』と。未だ知らず、即ち此の「五紀」なりや否やを。

⑥⑫『孟子』の四端は、仁・義・礼・知なり。此に「八端」と謂ふは、未だ詳かならず。
 ⑥⑬○天啓本、「常」を「恒」に作る。凌本同じ。
 ⑥⑭○盧云ふ、「本或いは『亦未易当也(亦未だ当たり易からざるなり)』に作る」(『春秋繁露注』)と。
 ⑥⑮「奚」の上、疑ふらくは「人」の字在りしかと。
 ⑥⑯上の「知」読んで「智」なり。○官本、下に「於」の字有りて、云ふ、「知於」、他本『之有』に作る」と。
 ⑥⑰十三字、疑ふらくは衍ならん。
 ⑥⑱「知」、疑ふらくは、「善」に作りしか、と。○官本に云ふ、「他本、『知之』倒す」と。
 ⑥⑲○盧云ふ、『民』の上、旧本『名』の字有り。衍文に係る」(『春秋繁露注』)と。
 ⑦⑰禽獸の性に質せば、則ち万民の性は善なり。人道の善に質せば、則ち民の性及ばざるなり。
 ⑦⑱此れ孟子の所謂の善を許すなり。
 ⑦⑲○凌云ふ、「性は善なりと謂へば、則ち民、性を尽くすを思はん。性未だ善ならずと謂へば、則ち民、性を化して善と為さんことを思はん。上質と下質と同じからずと雖も、其の上を待ちて善を明らかにするは一なり」(『春秋繁露注』)と。興案するに、「性を化す」は『荀子』(性惡篇)に出づ。性は悪なり。故に宜しく化すべし。性に善有れば、則ち之を拡充するのみ。凌も亦誤つて荀董を混じて一と為す。荀子は惟だ弁別して此に及ぶを知らずして、孟子の所云る性善を以て正理平治(性惡篇)の善と為す。故に務め之と相反す。然れども「塗の人以て禹と為る可し。皆以て仁義法正を知る可きの質有り。皆以て仁義法正を能くするの具有り」(『荀子』性惡篇)と云ふは、固より性に善端有るを知る。董子の此の数語は、孟の義をして豁如たらしむ。黄震、反つて此に拠りて其の未だ本

然の性に明かならざるを譏る。是れ程張に習ひて天地氣質を分けて二性と為す者なり。

⑦③名を以て之を言ふ。善は性に過ぎ、聖は善に過ぐ。

⑦④張惠言云ふ、「世を救ふの論、孟子と並び行はれて悖らず」（典拠未詳）と。興案するに、「未善」の二字は当に衍なるべし。本篇固より云ふ、「性は未だ全くは善と為らず」と。又云ふ、「性に善質有るも未だ善なる能はず」と。孟子と並び行われて悖らざる者に至りては、荀卿の性悪の説、是れのみ。董と孟と異なる者は、善の名を解釈するに在りて、性を論ずるの異なりに在らず。孟は性の端の禽獸より善なるを以て、即ち之を善と謂ひ、董は、善は当に聖賢に極むべく、当に性に名づけて善となすべからずと以へるも、其の実は一なり。禽獸より善なるのみ。故に拡充するを須ちて聖賢に至る。故に曰く、「人皆以て堯舜と為る可し」（告子下）と。以て可なる者は其の質なり。拡充に待つこと有るなり。人生まれながらにして堯舜たるを謂ふには非るなり。董の所謂の教へを待ちて成るとは此なり。性に善端有つて、心に善質有る、是れ万民の性、禽獸に異なること疑ひ無し。孟子の性を言ふは是なり。特だ董孟の「善」の字を解すること軽重の差有るのみ。董は『春秋』を習ひ、『春秋』に因りて名を正す。論、「性」の字に及べば、名の別を主とし、性は未だ善ならずと謂ふ。性は不善なりと謂ふに非ざるなり。孟の拡充を主とし、荀の矯抑を主とし、董の教化を主とし、其の人を善に勸むるに至りては、豈に異なること有らんや。孫星衍の『原性』に云ふ、「古の性を言ふ者異なること多し。孔子は性相近しと言ひ、周人世碩・宓子賤・漆雕開・公孫尼子の徒、性に善悪有りと云ひ（『論衡』本性篇）、孟子は性は善なりと言ひ、告子は人の性は善不善に分かつ無しと言ひ、荀子は性は悪なりと言ひ、董仲舒は性は善質有るも尽くは善なる能はずと言ふ。何を以て其の実を核さん。古、性と天道と通ずるも、陰陽五行に明らかならざれば、以て性を言ふ可からず。民は天地の中を受けて以て生ず。天に在

りては命と曰ひ、人に在りては性と曰ふ。故に『神農（本草）經』に、命を養ひて以て天に応じ、性を養ひて以て人に応ずと言ふ。天は陽と為り性を主り、地は陰と為りて情を主る。天先に成して地後に定む。故に情欲は性命に後る。五と六とは天地の中合にして、性に五常有り、情に六欲有り。五常は仁義礼知信、六欲とは喜怒哀樂好悪なり。陽は善なり。故に性は善なり。陰は欲なり。故に情に不善有り。陽極まりて陰を生ず。故に性の動くや情と為る。陰極まりて陽に勝つ。故に情の動くや欲と為る。性は動きて情に之き、変じて欲に之く。変ずる者は情なり。情動きて欲有り。変じて不善に之き、化して復た善に遷る。善は性なり。性、情に對すれば、則ち性を陽と為し、情を陰と為す。性を単言すれば、則ち性に陰陽有り。猶ほ天地を以て之を言へば、天を陽と為し、地を陰と為すも、天地を以て分けて之を言へば、天地各々陰陽有るがごとし。鬼区奥（人名未詳）言ふ、天に陰陽有り、地に亦陰陽有りと、是なり。四時を以て之を言へば、春夏を陽と為し、秋冬を陰と為す。孟仲季を以て之を言へば、一時に又各々陰陽有り。鬼区奥言ふ、陽中に陰有り、陰中に陽有りと。五行を以て之を言へば、木火を陽と為し、土金水を陰と為す。八卦を以て之を言へば、陽木は震、陰木は巽、陽土は艮、陰土は坤、陽金は乾、陰金は兌、離は火陽にして陰と含み、坎は水陰にして陽を含むなり。故に性は陰陽を兼ねと言ふは、性中の五常は皆陽に属し、五常分かれて仁礼を陽と為し、義智を陰と為し、信を陽と為す。情も亦陰陽有る者にして、情中の六欲は皆陰に属し、六欲は又分かれて、喜好樂を陽と為し、怒悲哀を陰と為すなり。孔子は性の陰陽を兼ねるを言ひ、又性の善なるを言ひ、又教へを待ちて善と為るを言ふ。『易』（繫辭上）に曰く、『一陰一陽之を道と謂ふ。之を成す者は性なり。之を継ぐ者は善なり』と。又曰く、『性を成して存せるを存す。道義の門なり』（同上）と。又曰く、『和して道德に順ひて義に理あり、理を窮め性を尽くして、人以て命に至る』（説卦伝）と。又曰く、『將に以て性命の理に順ひて、人

の道を立つるを仁と義と曰ふ（同上）と。夫れ性中に道徳有り、仁有り義有りと言へば、則ち是れ其の本と善なるを謂ふ。成ると言ひ、尽くすと言ひ、順ふと言へば、則ち教へを待ちて善と為るなり。然れば則ち孔子他日「性相近し、習ひ相遠し」（『論語』陽貨篇）と言ふを、『後漢書』黨錮列傳と。其の『上智と下愚と』（『論語』陽貨篇）と云ふは、『上智』は生まれながらにして之を知るを謂ひ、『下愚』は困しむも而も学ばざるを謂ひ、『移らざる』者（同上）の中を言ふ。黄子（人名不詳）の所云る人に五位有り、智人と下愚とは位を同じくせず、なり。或ひは智愚を以て美惡と為すは、誤てり。賈誼、孔子を引きて曰く、『少成は天性の若く、習慣は自然の如し』（『新書』保傅篇）と。又云ふ、『習、智と長ず。故に切して愧ぢず。化（化）もと「況」に作る。原典によつて改める）心と成る。故に道に中ること性の若し』（同上）と。夫れ習慣は自然の如しと言ふは、則ち本然の性に非ざるなり。又『道に中ること性の若し』と云ふは、則ち天命の性に非ざるなり。故に祖伊、王は『天性を虞らず』（『書經』西伯戡黎篇）と言ふは、其の善性を度らざるなり。惟だ偽『尚書』に伊尹、『習ひ性と成る』（太甲）と曰ふは、則ち性中に惡有るに似たり。魏晉の人の言、但だ深く弁ずるに足らず。孔子は陰陽を以て性を言ふ者にして、情に対して言はざるも、実は則ち性質を陽と為す。世子（周、世碩）の徒、性に善有り惡有りと云ふ（『論衡』本性篇）は、性の動を兼ねて言ふも、実は則ち情の惡なり。荀子、性は惡なりと言ふは、直だ誤つて情を性と為すのみ。告子、人の性は善不善を分かつたずと言ふは、則ち陰陽を分かつたず。孟子、性は善にして、良知良能も亦教へざるの性と云ふ。蓋し名正からざれば、則ち言順はれず（『論語』子路篇）。善いかな、許叔重（慎）の性を言ふや。曰く、『人の陽氣の性にして、善なる者なり』（『說文』第十篇上）と。其の情を言ふや、曰く、『人の陰氣にして、欲有る者なり』と。其の酒を言ふや、曰

く、『人の性の善惡に就く所以なり』（同上、第十四篇下）と。夫れ性陽を言ひて善と曰ふは、其の質を論ずるなり。情を言ひて惡有りと曰はずして、欲有りと曰ふは、欲に善有り惡有ればなり。酒を言ひて、則ち性に善惡有ると言ふは、酒は欲に屬し、欲に善惡有り。麥は陰にして黍は陽なり。相動くを得て酒と為る。人の性は酒を得て動く。許君、酒を以て人の性を觀るは、其の動に拠りて言へば、則ち性は情を兼ね。故に善惡有り。其の善なる者は性なり。惡なる者は情の欲なり。欲に惡有りと謂ふも、而も情に惡有りと謂ふべからず。情に惡有りと謂ふも、尤も性に惡有りと謂ふべからず。譬えば、夏至に陰生ずるも而も夏は之を冬と謂ふを得ず、冬至に陽生ずるも而も冬は之を夏と謂ふべからざるが如し。許君の説は『孝經鈎命決』に本づく。曰く、『情は陰に生じ、性は陽に生じ、性は陽に生ず。陽氣は仁にして、陰氣は貪なり。故に情に利欲有り、性に仁有るなり』と。緯書は漢末に出で、孔子の言に本づくこと多し。『文字書』（道原篇）に曰く、『人生まで靜なるは天の性なり。物に感じて動くは、性の欲なり』と。『管子』（心術下）曰く、『凡そ民の生くるや、必ず以て正平なり。之を失する所以は、必ず喜怒哀樂を以てなり』と。漢の詔に曰く、『夫れ人の性は皆五常有り。其の少しく長ずるに及んで、耳目、嗜欲に牽かる。故に五常銷きて邪心作る。情其の性を亂し、利其の義を亂す』（『漢書』宣元六王伝）と。張晏曰く、『性は受けて生まるる所なり。情は物を見て動く者なり』（同上、注）と。董仲舒曰く、『命は天の令なり。性は生の質なり。情は人の欲なり』（本篇）と。又曰く、『性已に善なりと謂へば、其の情を奈何せん』（同上）と。此れ性と情とを言ひて皆得たり。何を以て情も亦善有りと謂ふや。『礼記』（中庸篇）の喜怒哀樂を言ひて、『未だ発せざる之を中と謂ふ。発して皆節に中る、之を和と謂ふ』と曰ひ、『管子』（心術上）の『好むこと惡に迫られず。惡むこと其の理を失せず。欲すること其の情に過ぎず』と曰ふは、是れ情、未だ嘗て善ならずんばならず。故に『易』

に曰く、『利貞は性情なり』（乾卦辭、文言伝）と。孟子曰く、『乃ち其の情の若きは、則ち以て善と為す可し』（告子上）と。情に善有れば、將た欲と貪利と亦善か。欲と貪利とは即ち情の喜有り樂有るなり。発して節に中れば、則ち善ならざる無きなり。孔子曰く、『我、仁を欲す』（述而篇）と。又曰く、『己立達を欲して、人を立達せしむ』（雍也篇）と。夫れ己立達を欲するは、貪利なり。能く人を立達せしむれば、則ち貪利も亦善なり。故に公劉・太王の好みは、百姓之を同じくす（『孟子』梁惠王下）。孔子曰く、『飲食男女は、人の大欲存す』（『礼記』禮運篇）と。欲、未だ嘗て善ならずんばあらざるも、欲勝てば則ち能く性を乱す。故に曰く、『能く焉くんぞ剛なるを得ん』（『論語』公冶長）と。又曰く、『欲行はれざるを仁と為す』（『論語』憲問篇）と。欲は以て不善に至る可し。而れども欲の名は則ち善ならざる無きなり。（張祥雲云ふ（典拠未詳）、「欲と貪利も亦善なりとは、語未だ安からざるも、夫れ性の善に就きて推して情の善に到り、又情の善に就きて推して欲の善に到りて、方に浮屠の欲を断ち愛を去るの説を破るに足る。自づからはれ快論なり。但だ『欲』の字に二義有り。我、仁を欲すと、己立達せんと欲すの『欲』の字は、猶ほ『君と為らんと欲すれば、君道を尽す』（『孟子』離婁上）の『欲』の字のごとし。只だ虚字と作して之を解す。人の大欲と並び觀るを得ず。欲は原、情の中に在れば、未だ嘗て善ならずんばならず。孟子曰く、『心を養ふには算欲より善きは莫し』（盡心下）と又曰く、『其の欲せざる所を欲する無し』（盡心上）と。夫の『欲せざる』者は、己に善に非ざれば、則ち『欲』する所の者は善なり。特だ当に之を寡くして以て心を尽くすべきは、即ち所謂『欲勝てば則ち能く性を乱せ』（孫星衍『原性』前引）ばなり。欲の外に又添えて『貪利』の二字を出すに至りては、則ち欲は竟に是れ私欲にして、善と為すを得ずして、貪利尤も善と為すを得ざるなり。所云『公劉・太王の好』、以て貪利も亦善なりの証と為すは、究るに上下の文と隔断し、且つ未だ明確ならず。

即ち『己立達を欲するは貪利なり』の句は、亦未だ安からず」と。輿案するに、本書の保位權篇（第二十）に云ふ、「聖人の民を制する、之をして欲有るも、節を過ぐるを得ざらしむ。之をして敦朴なるも、欲無きを得ざらしむ」と。是れ董も亦未だ嘗て欲を以て不善の名と為さず。（孫星衍『原性』の文続く）人、性有りて情無きこと能はず。天、陽有りて陰無きこと能はず。天の時若は即ち人の中節なり。（案するに、此れ即ち董の所云る「身に性情有るは、猶ほ天に陰陽有るがごとし」なり。）浮屠の言に曰く、『欲を断ち愛を去る』（典拠未詳）と。又曰く、『愛欲交錯して、心中興濁し、清淨無垢にして、即ち自づから見性す』（典拠未詳）と。夫れ不善を断たずして愛欲を断つは、則ち獨陽生せず（『穀梁伝』莊公三年）、亢じて悔い有り（『易』乾卦、上九爻辭）、反つて以て不善に至る可し。故に彼の教へ五常を離るれば、所謂の教えざるの性にして、剛健なれども而も中正を失するなり。何を以て性は教へ待ちて善と為ると言ふ。『易』は、天道は陰陽、地道は柔剛、人道は仁義にして、后以て裁成、輔相して民を左右するを言ふ。『礼記』は人物の性を尽くし天地と参たるを言ふ。『書』は「剛克・柔克・正直」を云ふ（洪範）。剛は性に属し、柔は情に属し、之を平康にする者は教へなり。『礼記』は天命を性と謂ひ、性に率ふを道と謂ひ、道を修るを教へと謂ふと言ふ（中庸篇）。教へとは何ぞ。性に善有りて之に教へて以て至善に止まらしむ。故に『礼記』の明德を言ふや、民を新たにすと曰ひ、善に止まると曰ふ（大学篇）。「止」とは、文王の仁・敬・孝・慈・信に止まるが如し。即ち性中の五常にして、必ず教へて之を能くし、学んで之を知るなり。孟子、孩提の童、其の親を愛し、其の長を敬すと以へる（盡心上）は、是なり。然れども童にして其の親を愛するは、能く親を愛するに非ず、慈母の之に乳して愛移るなり。其の長を敬するは、能く長を敬するに非ず、嚴師の之に朴して敬移る。然れば則ち良知良能は恃むに足らず。必ず教学成りて、而る後に真に親を愛し長を敬するを知るな

り。故に董仲舒の、性は教へを待ちて善と為ると言ふは（本篇・実性篇）、是なり。又曰く、『善は米の如し、性は禾の如し。禾は米を出すと雖も、而も禾は未だ米と謂ふ可からざるなり。性は善を出すと雖も、而も性は未だ善と謂ふ可からず』（実性篇）と。又曰く、『今、聖人の言の中を按ずるに、本、性善の名無し。而して善人は吾得て之を見ず有り。使し万民の性皆已に善ならば、善人は何ぞ見ずと為すや』（同上）と。又曰く、『聖人の性は、以て性に名づく可からず。斗筭の性も、又以て性に名づく可からず。性に名づくるは、中民の性なり』（同上）と。又曰く、『善は性より出づるも、性は善と謂ふ可からず』と。此の諸語を按ずるに、董、名を正さんと欲するも、而も名愈々正しからざるなり。夫れ人は生まれながらにして皆中民なり。已に教ふれば、則ち性、情に勝つ。之を聖人と謂ふ。教へを失すれば、則ち情、性に勝つ。之を斗筭と謂ふ。性に三等有るに非ず。〔按ずるに、董の語は孔子の「上智下愚」の説に本づく。若し皆中民ならば、何を以て生知有らん。〕孔子の善人を言ふは、已に教ふるの性を謂ふ。猶ほ盛徳至善を称道するがごとし。故に見るを得難きなり。禾は米より出づるも、而も米と謂ふ可からざるは固よりなり。然れども亦之を中に米無しと謂ふ可からざるなり。此れ亦董の疏なり。〔按ずるに、董の「禾は未だ全くは米と為らず」と言ふは、以て性の未だ全くは善と為す可からざるを喩ふ。未だ嘗て中に米無しと云はず。此の駁も亦疏なり。〕告子、食色を以て性と為すに至つては、食色は情なり。荀子、以て利を好みて得るを欲すと為すは、人の情性なり。又云ふ、『人の性、生まれながらにして利を好み疾悪し、耳目の欲有り、声色を好む有り』（性悪篇）と云ふ。〔逸〕周書（官人解）、喜怒欲懼憂を謂ひて五氣と為し、『大戴（礼）』（文王官人）、五氣を改めて五性と為す。是れ皆情を以て性と為す。然れば則ち後儒の陰陽に通ぜずして、名を情性に正す能はざること甚だし。或ひと曰く、『商臣（楚の穆王）・越椒（楚の闞椒）の生まれながらにして悪形なる、梟鳥の母を食らふ、蒼鷹

の搏撃する、此れ皆性悪しければなり』と。答へて曰く、『此の形悪しきは、性悪しきに非ず。其の情將に悪に成らんとするが為の故の形先に見はる。人の不善を為すや、必ず以て長じて貪欲なり。其の貪欲なる者は情なり。其の少くして貪欲を知らず、未だ不善を為すに至らざる者、性なり。梟・鷹の悪しきや、以て食を求めて動くは亦欲なり。是れ情の悪にして、性と謂ふ可からざるなり』と。聖人の情性を治むるや、礼樂を以てす。礼は性を節し、樂は情を防ぐ。其の性情を用ふるや、忠恕を以てす。忠は性に率ひ、恕は情を推す。其の情性を善にするや、道徳を以てす。其の情の中和を道びく、之を道と謂ふ。其の性の至善を得る、之を徳と謂ふ。道徳忠恕は、皆五常の教へに本づく。五常を舍くは、則ち虚位なり。五常以て物を格りて能く善に止まる。格とは、蒼頡篇に曰く、『量度なり』と。物は事なり。『格物』とは猶ほ事を量ると言ふがごとし。其の事の至善、即ち五常の事を量るなり。或ひと言ふ、『格』は『正』なり、『格物』は名を其の事に正して、而る後に能く善を扱ひ、其の事の至善を知るを言ふ。故に『致知』と曰ふ、と。魏顛、先人の治命を用ひ（『左伝』宣公十五年）、晏子、君に社稷の為に死せば、則ち之に死せんと謂ひ（『晏子春秋』内篇雜上第五）、孔子、要盟は神信する勿しと謂ふ（『史記』孔子世家）が若きの類は、此れ中を執るの権を謂ふ。大学篇の「致知」は、即ち中庸篇（朱熹章句第六章）の舜の大知を称するなり。其の「格物」は即ち中を用ふるなり。「中庸」とは猶ほ中を用ふと言ふがごとし。解する者、庸を以て常と為すは之を失するなり。何を以て道徳、虚位と為るを言ふ。道徳の五常を離るるを、『易』、「小人の道長ず」と称し（象卦、象伝）、『礼（記）』、左道と称し（王制篇）、『書』、「凶徳」と称し（多方篇）、『左』伝、「昏徳」と称する（宣公三年）、是れなり。忠恕も五常に非れば亦虚位と為る。其の親暱に非れば、誰か敢へて之に任せん。則ち忠は忠に非ざるなり。小人の腹を以て君子の心と為せば、則ち恕は恕に非ざるなり。故に聖人の実を賣んで虚を悪

み、有を言ひて無を言はず、剛を貴びて柔を賤しむは、則ち儒者の道家に異なり、三代の学の宋学に異なればなり」と。輿案するに、陰陽を以て性を言ふは、董子に始まる。孫氏の此の論、頗る闡發多し。究めて之を論ずれば、性は内事にして、善は外事なり。内事は天に在り、外事は人に在り。天に在る者は一たび成りて変ぜず。人に在る者吾以て力を致す可し。下は学を以て相勸み、上は教へを以て自ら任ず。『春秋』の極治は、人人をして士君子の行ひ有りて、躬親みづから此を上に職として、万民をして善を下に生ぜしめ、亦勉めて之を行ふに在るのみ。

〈本文通釈〉

「名」というものは事物の本質から生まれる。事物の本質（を言い表すもの）でなければ「名」とはみなさない。「名」は聖人が事物の本質を表す手段である。「名」の意味は「真」である。それは例えば、『春秋』における）多くの刺譏はすべて闡闡として理解できない側面があるが、それぞれ事物の本質に立ち返ってみると闡闡たるものがかえつて明かとなるの（と同じ）である。曲線か直線かを明確にしようとするれば、墨繩を基準とするに越したことはなく、（そのように）是非を明確にしようとするれば、「名」を基準とするに越したことはない。「名」と是非との関係は、墨繩と曲直の関係と同じである。名称と実質の関係を問ひ、（名称と実質の）一致不一致を観察すれば、是非のありようはごまかすことはできなくなるのである。

今日、世間では本性の問題に暗く、それに関する所説が同じでない。（それなのに）どうして性の「名」に立ち返ろうとしないのであろうか。性の「名」は生（うまれながら）ではないのか。生まれながらの自然の資質のこと、それを性というのである。性とは資質である。性の資質を善の「名」に照らすに、（それは善の「名」に）合致することはできない。（善の「名」に）合致することが出来ないのに、なおこれについて資

質は善であるというのはどうしてだろうか。性の「名」は資質（という概念）から外れることはできない。資質（という概念）から毛ほども外れたら、それはもはや性（と呼べる）ものではない。このことは（よく）探求しなければならぬ。『春秋』は事物の道理を弁別して、（事物の）「名」を適正にする。（その結果）事物に「名」を与える場合にはその本質に合致させ、秋毫の末ほどの誤差もない。この結果、『春秋』僖公十六年の経文に「春、王正月戊申朔、實石于宋五。是月、六鵠退飛、過宋都。」とあり、『公羊伝』によれば、實石については、何かが隕ちたと聞いて、実見してみると石であり、よく観察すれば五個であった。六鵠については、まず六羽の鵠を実見し、よく観察すると退飛していたというように、この経文は孔子の観測の順序に厳密に従って書かれたとされているが、ここでは）實石という「名」を与える際には、五の数を後に置き、鵠の退飛を言うには六の数を先に置いて（厳密な正名の考え方を示して）いるのである。聖人が「正名」に厳密であることこの通りである。君子は言語に対してゆるがせにすることはないが、『春秋』の「五石」や「六鵠」の用辞が実例である。様々な悪を内部に押し止め、外に出ることができないようにさせるものは心である。従つて心の「名」は、「根」（とどめる）である。人が気を受け（けて生まれ）る際に、もし悪がないのであれば、心は何を止める必要があらう。私は心という（聖人が採用した）「名」によつて、人の実質を得たのである。人の実質とは貪と仁であり、貪と仁の気が双方ともに身に存在している。身という「名」は、（聖人が）天の意味で採用したのである。（というのは）天は陰陽の作用を双方有し、（それに対応して）身もまた貪と仁の性を双方有する。天には（陰を押し止めて陽を侵させない）陰陽の禁（の作用）があり、（それに応じて）身には情欲の制止（の作用）が有り、（身は）天道と同じである（からのことである）。その（天の陰陽の禁の）結果として、陰の活動は（陽の）春夏（を起す働き）を侵すことはできず、

月の陰の部分は常に日光から隠れ、全面が陰になつていゝと思えばたちまち欠けてしまふ。天が陰の活動を（陽を侵さないように）禁ずることこの通りである。（だから人は）どうして情欲を減損、抑止して天に応じないわけに行こうか。天が禁じるものは身もそれを禁じるわけであるから、身は天と同じだと言ふのである。（身は）天が禁じるものを禁じるのであり、天（たる自己の身そのもの）を禁じるのではない。（この結果）必然的に（天与のものではあるが、天が陰を禁じるように、禁じる必要のある身の中の）情欲は教化によらなければ、どうしても抑止することができないと言ふことが知られるのである。実質に従つて「名」が与えられていることを探求すれば、（人に）教えが加わらないとき、性は（生まれながらのものであるから）どうしてもにわかはこの通り（に情欲を抑止できるもの）であろうか。

つまり、性は稲（ここでは穀物の幹・葉の総称としての意で用いる）に譬えられ、善は米（ここでは穀物の実の総称の意で用いる）に譬えられる。米は稲から生じるが、稲はその全てが米となるわけにはいかない。（同様に）善は性から生じるが、性はその全てが善を実現するわけではない。善（の実現）と米（の生産）とは、人が天（の作用）を継承して（天の手の内から）外に（引き）出すものであり、天の働きの内に（自然の存在として）あるわけではない。天の働きは、ある程度まで至つて終つてしまふのである。（これらの現象を天の働きの）内部に限定すれば、それを天性と呼び、（天の働きの）外まで限定を拡張するもの、それを人事というのである。人事は性の外に（あつて、性に加わるもの）であるが、性は（それによつて）徳を成就せざるを得ないのである。

民という「号」は、暝（暗い）の意味で採用されたのである。もし性が（生まれながらにして）すでに善であれば、どうして（聖人は）「暝」を「号」としたであろう。この「暝」という意味の語を当てたのは、それが助けなければつまずきあやまり、乱れ狂つてしまい、どうしても善

となることはできないからである。（万民の）性は目（の働き）に似てゐる。目は暗いところに横になつて眠り、（やがて）目を覚まして初めて物が見えるようになる。そのまだ覚めない状態では、見る資質があると言ふことはできるが、物が見えているということとはできない。これと同様、万民の性は（善に至る）資質はあるが、まだ目覚め（て善に至ることができてゐるわけではない。それは例えば、眠っている者が目覚め（て初めて見え）るようなもので、民を教化して初めて善になるのである。まだ目覚めてゐない状態では、善に至る資質はあるが、善に至つてゐるといふことはできない。これは目が眠つて覚めるのと同様の関係である。心を静めてじっくりと考えてみれば、以上の説明は理解されるであろう。性は眠つてまだ覚めない状態のようなものであり、その状態は天の為す所である。天の為す所に倣つて、（聖人が）その「号」を与えたために、「民」と言ふようになったのである。「民」の意味はちょうど「暝」と同じである。その（聖人が与えた）「名」や「号」（の意味）に従いながら、道理を理解していけばその道理が得られるだろう。つまり、これは「名」や「号」を天地に対して適正に把握するということである。

天地が生み出したものを性情と言ふ。性情はいずれも一つの眠りの状態であり、情も（天地の生むものであるから）やはり性である。性はすでに善であると言へば、情はどうなるだろう。（すでに善であると言へば）（ではない）故に聖人は性は善であると言つて、「名」を混乱させることがないのである。身に性情があるのは、天に陰陽があるのと同じことである。人の資質を言おうとして情（言い及ぶこと）がないのは、天の陽を言つて陰（に言い及ぶこと）がないの同じである。論が行き詰まつた者は、反駁を受ける機会もない（それほどにこのような考え方はナンセンスだ）。

（聖人が）性という「名」を用いたのは、上等の人や下等の人を対象

としたのではなく、中等の人を対象として名づけたのである。(その中等の人に与えられた)性とは蘭や卵のようなものである。卵は親鳥が覆い温めて初めて雛となり、蘭は人が引き出して初めて糸となる。性も教化があつて初めて善となるのであり、この(教化によつて善とする)ことを天を真に言うのである。

天は民の性を生じて善質を持たせたが、それはまだ善たりえない。そこで民のために王を立てて、彼等を善たらしめようとするのであり、これが天の意志である。民は(そのままでは)まだ善たりえない性を天から受け、謙虚な態度で性を善にする教えを王から受けるのである。王は天の意志を受け、民の性を善にすることを任務とするものである。今、民の眞の資質を探索しながら、民の性はすでに善である言うのは、天の意志を見失い、王の任務を否定することである。万民の性がもしすでに善であるとするなら、王者は受命していつたい何を任務とするのである。その考え方の「名」に対する認識は正しくなく、その結果(王の)重大な任務を否定し天命に違背するのであり、聖人の言をそしめるものである。

『春秋』の用辞では、(諸国に対する魯、夷狄に対する中夏は「内」とされるが、その)内に起こつたことで外と関連するものは、外のことから書かれるが、今、万民の性は、外からする教えを待つて初めて善となることができるのであり、善は教えと連続させることはできるが、性と連続させることはできない。性と連続させれば、混乱が多く精密でなくなり、(これでは)自分だけが功績を挙げ(たつもりになつて、賢聖を無視するものであるが、これは世間の有名人が誤つて言い出したものであり、『春秋』の用辞の方法ではない。不正な言葉や事実に基づかない説は、君子は度外視するのであり、どうして相手にしておられよう。ある人が言う。「性には善となる端緒があり、心には善となる資質はあるのに、それでどうして善ではないのか」と。これに答えよう。それ

は間違いである。蘭は糸が具わっているが、蘭は糸そのものではない。卵は雛を内包しているが、雛そのものではない。この類比はすべて間違つていない。また何を疑おうか。天は民を生じて偉大なる規範を与えているのである。性を論じるものは(この規範)を違えてはならない。しかしながら同じ或人が言う。「性は善である」と。またある人が言う。「性は善ではない」と。(これらは)その善とするものが意味を異にしているのである。性には善となる端緒があり、(まだ教化を受けない)子どもも父母を愛するが、(これは)禽獣よりは善であるから、これを善であるという。これは孟子の善である。三綱(君臣・父子・夫婦の三大人倫の規範)や五紀(父の義・母の慈・兄の友・弟の恭・子の孝)、『義証』引く『国語』の「五義」と同意と見なす)に従い、八端の道理(義不祥)に通じ、忠信にして博く愛し、敦厚にして礼を好むようであつて初めて善ということができるといふのは、これは聖人の善である。ところで孔子は、「善人は私に出会うことがない。行動が筋金に通つているものに出会えれば、それでよからう」(『論語』述而篇)と言つている。このことから考えて、聖人の善とするものは容易には身に付かないのである。(聖人の善は)禽獣より善であればそれで善だとするのではない。もし(善への)端緒を働かせて禽獣より善となれば、それで(聖人が)善であると言つているとすれば、(聖人孔子は)どうして善人には出会えないと言つたりしようか。そもそも禽獣より善であることがまだ善であるとしえないのは、草木より知能があるからとてそれに知という名を与えられないのと同じである。(以下の「万民の性は禽獣より善にして善と名づくる得ず。」の一文は『義証』によつて衍文と見なす。)善の名は聖人から(定義を)受け取る。聖人が名づけたものは天下が正しいと見なす。朝夕の時刻の調整を担当するものは北極星を(基準として)見、疑わしい事柄を正確に捉えようとするものは、(基準として)聖人を見るものである。聖人は王のいない世界、教化を受けない民は、善が身に

付かないと考えた。善の身に付けがたさは、まさにかくの如くであり、万民の性は善を身に付けているというのは間違っている。禽獣の性に比べ質せば、万民の性は善であるが、人道の善に比べ質せば、民の性はそこまで到達していない。万民の性が禽獣より善いというのは、これを認めよう。(しかし) 聖人の規定する善は認められない。私の人の命や性と比べた質し方は孟子とは異なる。孟子は下級の方へ向かい禽獣の行為と比べ質したので性は已に善だと言ったのである。私は上級の方へ向かい聖人の行為に比べ質す。故に性はまだ善ではないと言っているのである。(正名の考え方から言つて) 善は性以上のものであり、聖人は善以上の存在であり(聖人・善・性を同列に考えてはならない)。「春秋」は、(隠公から哀公までその即位の初年には「二年」と言わず、「元年」と言つて)「元」を尊んでいる。つまり(これは「一年」では諸侯の即位の初年の重要な意義が表現できないから、「元年」と書き改めたものであつて)「名」を適正にすることを慎重に行つたものである。「名」は(このように聖人が厳密に与えたものであり、われわれが)創始しうるものでない。従つてどうして(聖人の善を無視して、性は)すでに善であると言おうか。

実性第三十六

〈本文〉

孔子曰く、「名正からざれば、則ち言順はれず」(『論語』子路篇)と。

① 今、性已に善なりと謂へば、教へ無くして其の自然の如くするに幾からずや。② 又政を為すの道に従はざらん。且つ名は性の実にして、実は性の質なり。③ 質は教へ無きの時、何ぞ遽かに能く善ならん。④ 善は米の如し、性は禾の如し。禾は米を出すと雖も、而も禾は未だ米と謂ふ可からざるなり。性は善を出すと雖も、而も性は未だ善と謂ふ可

からざるなり。米と善とは、人の天を繼いで外に成すものなり。天の爲す所の内に在るに非ざるなり。天の爲す所は、至る所有りて止まる。之を内に止むる、之を天と謂ふ。之を外に止むる、之を王教と謂ふ。王教、性の外に在りて、性、遂げざるを得ず。⑤ 故に曰く、性に善質有るも、而も未だ善と爲す能はず。豈に敢へて辞を異(「異」もと「美」に作る。「義証」によつて改める)にせん。其の突然るなり。⑥ 天の爲す所は、繭・麻と禾に止まる。⑦ 麻を以て布を爲し、繭を以て糸を爲し、禾を以て米を爲す(もと「以米爲飯」に作る。「義証」によつて「以禾爲米」に改める)。⑧ 性を以て善を爲すは、此れ皆聖人の天を繼いで進むる所なり。性情質樸の能く至るものに非るなり。故に性と謂ふ可からず。朝夕を正す者は北辰を視、嫌疑を正す者は聖人を視る。聖人の名づくる所は、天下以て正しと爲す。今、聖人の言中を按ずるに、本、性善の名無し。⑨ 而して曰く(「曰」もと「有」に作る。「義証」によつて改める)、「善人は吾之を見るを得ず」(『論語』述而篇)と。⑩ 使し万民の性皆已に能く善ならば、⑪ 善人なる者、何為すれぞ見ざる。孔子、此を言ふの意を觀るに、以て善は甚だ当たり難しと為すなり。⑫ 而して孟子以て万民の性は皆能く之に当たると為すは、過てり。聖人の性は以て性を名とす可からず。斗筭の性も又性を名とす可からず。⑬ 性を名とする者は中民の性なり。⑭ 中民の性は繭の如く卵の如し。卵は覆すること二十日を待ちて而る後に能く雛と爲る。⑮ 繭は繰る(「繰」もと「繰」につくる。「義証」によつて改める)に洎湯を以てするを待ちて而る後に能く糸と爲る。⑯ 性は教訓に漸るを待ちて而る後に能く善と爲る。善は教訓の然らしむる所なり。⑰ 質樸の能く至る所に非ざるなり。故に性と謂はず。性は宜しく名を知るべし。⑱ 待つ所無くして起り、生まれながらにして自づから有する所なり。善、自づから有する所なれば、則ち教訓は已に性に非ざるなり。⑲ 是を以て米は粟より出づるも、而も粟は米と謂ふ可からず。⑳ 玉は璞より出づるも、而

も璞は玉と謂ふ可からず。善は性より出づるも、而も性は善と謂ふ可からず。其の比多く物に在る者然りと為し、性に在る者は以て然らずと為せば、何ぞ類に通ぜざる。卵の性は未だ雛と作す能はざるなり。繭の性は未だ糸と作す能はず。麻の性は未だ縷と為す能はず。粟の性は未だ米と為す能はざるなり。『春秋』は物の理を別ちて以て其の名を正す。物に名づくるに必ず各々其の真に因り。其の義を真にするや、②① 其の情を真にするや、乃ち以て名と為す。②② 實石に名づけては、則ち其の五を後にし、退飛には、則ち其の六を先にす。此れ皆其の真なり。聖人の言に於ける、苟もする所無きのみ。性とは天質の樸なり。善は王教の化なり。②③ 其の質無くんば、則ち王教も化する能はず、其の王教無くんば、則ち質樸善なる能はず。②④ 質能はずして善性を以てするは（もと「質而不以善性」に作る。『義証』によつて「質不能而以善性」に改める）、②⑤ 其の名正しからず。故に受けざるなり。②⑥

〈義証〉

①『論語』(子路篇) 注に馬(融)云ふ、「百事の名を正す」と。鄭(玄)云ふ、「名を正す」とは書字を正すを謂ふ。古、「名」と曰ふは、今の世、「字」と曰ふ。礼の記に曰く、「百名以上は則ち之を書して策に載す」(『儀礼』聘禮)と。孔子、時に教へ行はれざるを見る。故に其の文字の誤りを正さんと欲す」と。(『春秋』) 昭二十年「盜、衛侯の兄軋を殺す」と。何注に、「公子もて之を言はず、兄弟もて之を言ふは、敵体の詞なり。尊卑明らかならざるに嫌す。故に之を加へて以て之を絶つ。名を正す所以なり」と。定公九年(八年の誤)「盜、宝玉大弓を竊む」と。何注に、「取ると言はずして竊むと言ふは、名を正すなり。定公、季孫に従ひて馬を偁る。孔子曰く、『君の臣に於ける、取る有るも偁るなし』と。而して君臣の義立つ」と。(事は亦『韓詩外伝』・『新序』雜事篇に見ゆ)『白虎通』姓名篇の人名を論ずる、『漢』書『薛宣伝の刑

律を定むる、(『同上』) 王莽伝に臨を立てて統義陽王と為すは、並んで孔子の正名の語を用ふ。蓋し名の包む所の者は広し。文字は特だに一端のみ。一名有れば一字有り。「偁る」も「取る」も皆字義なり。此の篇、「性」字「善」字を釈して、特に此の語を引くは、固より文字を包括して内に在り。『穀梁伝』僖十九年に亦云ふ、「梁亡ぶ。鄭、其の師を棄つ。我、加損すること無し。名を正すのみ」と。名を正すは固より『春秋』の公例なり。『晋書』隱逸伝、魯勝の「墨弁叙」に注するを載せて云ふ、「名は同異を別ち、是非を明らかにする所以、道義の門、教化の準繩なり。孔子曰く、『必ずや名を正さんか。名正からざれば、則ち事成らず』(『論語』子路篇)と。又云ふ、「同異は是非を生み、是非は吉凶を生む。弁を一物に取りて、極を天下の汗隆に原ぬる、名の至りなり」と。名の字を説くこと亦精なり。公孫龍氏・文子の徒、亦吾が夫子の名を正すに抛りて説を為すと雖も、然れども区々の物質形色の弁にして、其の学は小なり。

②之に任じて教へを加へざるを謂ふ。

③名を以て之を言へば、則ち性を生と為す。実を以て之を言へば、則ち性を質と為す。而して質は生に原づく。是れ名は亦実なり。

④〇盧云ふ、「質」の字、旧、誤つて「之」に作る。大典本、「也」に作る。何本、「作質」の二字に作る。今案するに、止だ当に「質」の字に作るを是と為すべきのみ(『春秋繁露注』)と。

⑤上篇「成徳」に作る。

⑥盧云ふ、「美辭」、疑ふらくは、是れ「異辭」ならん(『春秋繁露注』)と。

⑦〇凌本「麻」を「蔴」に作る。下同じ。

⑧当に「以禾為米」に作るべし。

⑨〇凌本、「言」の下に「之」の字有り。

⑩盧云ふ、「矣」、疑ふらくは当に「歎」に作るべし(『春秋繁露注』)と。輿案するに、「有」、疑ふらくは「曰」の誤りならん。

- ⑪ 官本に云ふ、「他本、『已』を『以』に作る」と。
- ⑫ 天啓本、「甚」、「当」の下に在り。凌本同じ。
- ⑬ 「斗筭の性」とは、蓋し孔子の所謂「下愚」（『論語』陽貨篇）ならん。『論語』子路篇に、「斗筭の人、何ぞ算ふるに足らん」と。朱子云ふ、「鄙細を言ふなり」と（同条『論語集註』）。案ずるに、人の品量は同じからず。天地の量有る者は聖人なり。此より下に江海の量・鐘鼎の量・釜斛の量有りて、斗筭爲るに極まる。子貢、士を問ひ、遞すること三たび、等を下して、子以て斗筭の人と爲す。蓋し善を容ること多からずして、自ら鄙細に安んずる者ならん。其の帰は則ち愚なり。程子謂ふ、「商辛は才力人に過ぐ。聖人其の自ら善より絶つを以て之を下愚と謂ふ」（『論語集註』陽貨篇上智下愚章所引）と。亦此の意なり。
- ⑭ 「中民」とは、猶ほ「庸民」のごとし。『莊子』則陽（外物の誤）及び徐无鬼篇に見ゆ。亦「中庸」と爲す。賈誼の「過秦論」の「材能、中庸に及ばず」を『史記』（陳涉世家）、「中人」に作る。「中人」は即ち「中民」なり。『荀子』王制篇に、「中庸の民は政を待たずして化す」と。『潜夫論』德化篇に云ふ、「上智と下愚とは民は少なくして、中庸の民は多し。中民の世に生まるるや、猶ほ鑠金の鑪に在るがごときなり。範に従ひて変化し、惟だ冷の爲す所のままにして、方円厚薄、鎔に随ひて制するのみ。是の故に世の善否、俗の厚薄、皆君に在り」と。義、此に本づく。
- ⑮ 凌云ふ、「宋、陸佃」『埤雅』（鴉鳥、鷲）に、『今、雞鷲は孚卵す。鷲は二十日にして化す』（『春秋繁露注』）と。
- ⑯ 「縲」当に「縲」と爲すべし。『說文』（第一十三篇下）に、「縲」は繭を繅きて糸と爲すなり」と。「涓湯」は即ち「沸湯」なり。『史記』龜策伝に、「腸は涓湯するが如し」と。音は官なり。○「涓」、天啓本、「縮」に作る。
- ⑰ 天啓本、「訓」を「誨」に作る。凌本同じ。
- ⑱ 「性者」の上、疑ふらくは脱字有らん。
- ⑲ 如し善生まれながらにして自づから有せば、則ち教訓に由りて而る後に善たる者は已に性に非ざるなり。
- ⑳ 凌云ふ、『春秋說題辭』に、『粟の言たる続なり。粟は五変す。一変して陽を以て生じて苗と爲る。再変して秀でて禾と爲る。三変して祭り、然る後に之を粟と謂ふ。四変して白に入れ、米、甲より出す。五変して蒸飯して食らふ可し』（『春秋繁露注』）と。
- ㉑ 盧云ふ、『其義』の上、本或いは『真』の字無し。何本有り。錢（唐）疑ふらくは、当に『名』に作るべしと（『春秋繁露注』）と。輿案ずるに、『真』に作るも亦通ず。事を以て言へば則ち義と爲す。物を以て言へば則ち情と爲す。必ず其の真を得て而る後に以て名と爲す可し。
- ㉒ 聖人は名を正して而る後に之に循ふ。是の故に物には「物に名づく」と曰ひ、義には「義に名づく」と曰ひ、象には「形に名づく」と曰ふ。浸仮して其の真を失する者有り。故に名家別に自ら学有り。
- ㉓ 中庸の「性に率ふを之道と謂ふ。道を修るを之教へと謂ふ」（『中庸章句』第一章）、『荀子』礼論に「性は、本始の質樸なり。偽は、文理の隆盛なり。性無くんば、則ち偽の加はる所無く、偽無くんば、則ち性自ら美なる能はず」と云ふも亦此の數語の意なり。「偽」とは爲すなり。王教の謂ひなり。『易』に、「后、以天地の道を裁成、天地の宜を輔相して、以て民を左右す」（泰卦、象伝）と曰ひ、『書経』二 洪範に、「剛克、柔克」と曰ふは、皆教への効なり。是の故に古、教へざるの民無し。教へは何に于いてか始まる。則ち所云る三綱・五紀・八端の理、其の大端のみ。
- ㉔ 張惠言云ふ、『無其實』の二句、孟子・荀子の義と俱に大同なり。固より三子の性を言ふ、其の帰、一なるを知るなり（『典拠未詳』）と。輿案ずるに、『白虎通』三教篇に、「民に質樸なる者有り。教へずんば成らず。故に『尚書』（呂刑）に曰く、『以て徳を祇む教ふ』と。鄭、『詩』角弓の「猥に木に升るを教ふる毋し」に箋して云ふ、「以て人の心に皆

仁義有り。之に教ふれば則ち進むに喩ふるなり」と。並んで此と義同じ。
 ②⑤ 盧云ふ、「句、疑ふらくは、訛有らん」(『春秋繁露注』)と。興案するに、疑ふらくは、「質不能而以善性(質能はずして善性を以てす)」に作りしならん。

②⑥ 此の篇、深察名号と詞、複すること多く、後人の掇拾に出づるを知る。

〈本文通釈〉

孔子が言っている。「名が適正でなければ言は従われぬ」と。今、性が(生まれながらにして)すでに善であると言うのは、ほとんど教化なしに自然のままに任せるということではあるまいか。またそれは政道に従わないことにもなるだろう。そもそも(性という)「名」は性の中身であり、(性の)中身というのは性の本質のことである。(性の)本質が、教化を受けない時、どうして突如として善となることができようか。善を米に譬えれば、性は稲である。稲は米を生み出すが、稲(の段階で)はまだ米と言うことはできない。性は善を生み出すが、性(の段階で)はまだ善ということとはできない。米(の生産)と善(の実現)とは、人が天(の作用)を継承して(天の手の内から)外に(引き)出すものであり、天の働きの内に(自然の存在として)あるわけではない。天の働きの、ある程度まで至って終わってしまうのである。(これらの現象を天の働きの)内部に限定すれば、それを天性と呼び、(天の働きの)外まで限定を拡げるもの、それを王教というのである。王教は性の外に(あつて、性に加わるもので)あるが、性は(それによつて善を)完成せざるを得ないのである。従つて、性に善質はあるが、まだ善とみなすわけにはいかない。どうして言葉を変えて、性は善なり言えようか。その(性の)実質がそう(未だ善ではない)なのである。天の為すものは、(糸に対する)繭、(布に対する)麻、(米に対する)稲である。麻から布を作り、繭から糸を作り、稲から米を作り、性から善を実現する

こと、これらはいずれも聖人が天(の作用)を継承して推進するものであり、(天の所為である)情性や(性情のままの)質朴さが実現するわけではない。つまり、性(が善を実現する)とは言えない。

朝夕の時刻の調整を担当するものは北極星を(基準として)見、疑わしい事柄を正確に捉えようとするものは、(基準として)聖人を見る。聖人が名づけたものは天下が正しいと見なす。そこで聖人の言葉の内を調べてみるに、そもそも性が善であるという「名」(概念規定)は見当たらず、むしろ「善人は私は出会ふことがない」(『論語』述而篇)と述べている。万民の性がすべてすでに善でありえたら、善人はどうして出会わないことがあるか。孔子がこれを語つた意味を考えてみるに、(孔子は)善は甚だ身に付け難いと考えているのである。しかるに孟子は万民の性はすべて皆善を身に付けていると考えたが、これは誤りである。

聖人の性は、性という「名」(概念)を当てることはできない。器量の小さい下愚の性も、性という「名」(同上)を当てることはできない。性という「名」(同上)を当てることができるのは、普通の民の性である。普通の民の性は、繭や卵と同様である。卵は(親鳥が)覆い温めること二十日で初めて雛となることができ、繭は(人が)繰つて熱湯に浸して初めて糸となることができる。(それと同様)性は教化訓育を待つて初めて善となるのである。善は教化訓育の結果であり、(性のままの)質朴さが実現するわけではない。つまり性(が善を実現する)とは言えない。

性というものはその「名」(概念)が理解される。それは(何者かに)頼ることなく生起し、生まれながらにして自然に具有するものである。もし善が自然に(性に)具わつていれば、教化訓育は性(に対するもの)ではなくなつてしま(い)、教化訓育の妥当する場がなくなつてしま(う)。つまり、米はもみから出てくるが、もみが(直ちに)米であるとは言え

ない。玉は璞から出るが、璞が（直ちに）玉であるとは言えない。（同様）善は性から出るが、性が（直ちに）善であるとは言えない。この類比は多くの人が物についてはその通りであるとすが、性についてはそうではないとするが、（それならば）どうして（性の）比類について考えてみないのか。卵の性は、雛そのものであるわけではなく、繭の性は糸そのものであるわけではなく、麻の性は繊維そのものであるわけではなく、もみの性が米そのものであるわけではないのだ。

『春秋』は事物の道理を弁別し、事物の「名」を適正にし、事物に「名」を与えるには、必ずそれぞれその本質による。（事については）その意義の本質を表し、（物については）その情態の本質を表すようにして「名」を与えている。（たとえば僖公十六年の『春秋』の經文に「春、王正月戊申朔、質石于宋五。是月、六鷁退飛、過宋都。」とあるが、ここでは）質石という「名」を与える際には、五の数を後に置き、鷁の退飛を言うには六の数を先に置いているが、これは（孔子の觀測の順序に従ったもの——前篇参照——であり）それぞれの（事象の孔子が捉えた）本質を示すものである。（このように）聖人は言語において少しもゆるがせにしないのである。

（この聖人の「正名」に対する厳密さから、なぜ聖人が「性」という「名」を与えたかを考えれば分かる通り）性とは（生であつて）天与の性質の素朴さのことであり、善とは王教による変化（によつてもたらされるもの）のことである。その（天与の）素朴さがなければ、王教も人を変化させることはできず、王教がなければ、質朴なものは（質朴なまま終わり）善となることはできない。

諸侯第三十七

〈本文〉

生育養長は、成りて更め生じ、終はりて復た始まる。其の事、利して民を活かす所以の者、已む無し。① 天、言はずと雖も、其の瞻足せしめんと欲するの意、見る可きなり。古の聖人、天意の人に厚きを見るなり。故に南面して天下に君たり。必ず以て之を兼ね利す。其の遠き者は目もて見る能はず、其の隠るる者は耳もて聞く能はざるが為に、是に於いて、千里之外、地を割いて民を分かちて、国を建て君を立つ。天子の為に見えざる所を視、聞こえざる所を聴かしむ。② 朝する者、召して之を問ふなり。③ 諸侯の言為る、猶ほ諸侯のごときなり。④

〈義証〉

- ① 官本に云ふ、「他本、『者』の下『而』の字有り」と。
- ② 『白虎通』封公侯篇に、「王者は三公・九卿・二十七大夫を立つ。以て教道して幽隱を昭らかにするに足るに、必ず諸侯を封ずるは何ぞ。民を重んずるの至りなり」と。
- ③ 凌本、「者」を「夕」に作る。
- ④ 『周礼』職方氏の「侯服」の注に、「侯」とは、王者の為に斥候するなり」と。○凌本、「之」字無し。

〈本文通釈〉

（万物の）生育成長は、一つが完成すれば別のものが更に生じ、一つのものにおいて終ると別のものにおいてまた始まる。この（万物の生育成長という）事においては、民を利し活かす機能が止まることはない。天は物言わないが、その民を充足させようとする意志は明確である。古の聖人は、天の意志が人に手厚いを見、そこで南面して天下に君となり、

絶対的に民を広く利したのである。(その際、聖人から)遠く離れたところに在る者は見ることができず、ひっそり暮らす者はその声が届かないために、千里より遠い地方について、地を割き民を分け、国を建て君を立て、天子に代わって(天子の)目の届かないところを見、(天子の)耳に聞こえないところを聞くようにさせた。(そして)朝見した者はこれを召し呼んで(民の実情を)尋ねることとした。「諸侯」の語は、諸々の伺候する者というのと同じである。

五行対篇第三十八①

〈義証〉

①『玉篇』五に、『春秋繁露』に陰陽五篇・五行八篇・天地陰陽一篇有り」と。今按ずるに、其の目は、則ち此の篇及び五行之義・五行相生・五行相勝・治水五行・治乱五行・五行変救・五行五事、凡そ九篇なり。或いは此の篇を数へざりしなり。陰陽五篇は、則ち陽尊陰卑・陰陽位・陰陽終始・陰陽義・陰陽出入、是なりと為す。天地陰陽は今第十七巻中に在り。

〈本文〉

河間献王、温城の董君に問うて曰く、①『孝経』に曰く、『夫れ孝は、天の経、地の義なり』と。何の謂ひぞや」と。対へて曰く、「天に五行有り。木火土金水、是れなり。木は火を生み、火は土を生み、土は金を生み、金は水を生む。② 水は冬を為し、③ 金は秋を為し、④ 土は季夏を為し、⑤ 火は夏を為し、⑥ 木は春を為す。⑦ 春は生を主り、夏は長を主り、季夏は養を主り、冬は蔵を主る。蔵は冬の成す所なり。是の故に父の生ずる所は、其の子之を長じ、父の長ずる所は、其の子之を養ひ、父の養ふ所は、其の子之を成す。諸々の父の成す所は、

⑧ 其の子皆奉承して之を続行し、⑨ 敢へて父の意の如くするを致さずんばあらざるは、尽く人の道と為すなり。故に五行なるものは五行なり。⑩ 此に由りて之を觀ば、父之を授け、子之を受くるは乃ち天の道なり。故に『夫れ孝は天の経なり』曰ふは、此を之謂ふなり」と。王曰く、「善きかな。天の経は既に之を聞くを得たり。願はくは地の義を聞かん」と。対へて曰く、「地、雲を出して雨を為し、氣を起こして風を為す。⑪ 風雨は地の為す所なるも、地敢へて其の功名を有せずして、必ず之を天に上ぼし、⑫ 天より下る者の若くす。⑬ もと「命若從天氣者」に作る。『義証』によつて「若從天下者」に改める。⑭ 故に天風、天雨と曰ひ、地風、地雨と曰ふこと莫きなり。勤勞は地に在りて、名は一に天に歸す。⑮ 至つて義有るに非ずんば、其れ孰か能く此を行はんや。故に下の上に事ふること、地の天に事ふるが如くするや、大忠と謂ふ可し。⑯ 土は火の子なり。五行は土より貴きは莫く、土の四時に於ける、命ずる所の者無けれども、火と功名を分けず。⑰ 木は春に名づけ、火は夏に名づけ、金は秋に名づけ、水は冬に名づく。忠信の義、孝子の行は之を土に取る。⑱ 土は五行の最も貴き者なり。其の義は以て加ふ可からず。五声は宮より貴きは莫く、五味は甘より美なるは莫く、五色は黄より盛んなるは莫し。⑲ 此、孝は地の義なるを謂ふなり」と。王曰く、「善いかな」と。

〈義証〉

① 凌云ふ、『漢書』に、『河間献王德、孝景の二年を以て立つ。学を修め古を好み、実字求是す』(『春秋繁露注』)と。沈欽韓云ふ、『漢志』(『漢書』地理志)の『信都国』に昌城県有りと。『統』(『後漢書』)志(『郡国二』)の『安平国』に『阜城は故の昌城なり』と。(唐、李吉甫)『元和(郡県)志』、『阜城』は、漢の信都国に属す。所云る『温城の董君』とは、疑ふらくは、是れ昌城の誤ならん。蓋し広川は国為り、而し

- て昌城は其の県ならん」(典拠未詳)と。輿案するに、本伝に「仲舒は広川の人なり」と。『漢志』、広川は信都国に属す。又脩県有り。顔注に、「音は条」と。『統』(後漢書)志(郡国二)後漢、改めて渤海に属す。『水経』(巻五)河水の注に、「王莽河は、故瀆は平原鬲より来たり、北のかた脩県の故城を逕、東のかた下つて平原安張の甲河に入る。左瀆は広川より来たり、東北して脩県の東に至り、清河と会ふ」と。又(巻十)濁漳水の注に云ふ、「桑社溝水は信都の觀津より来たり、東のかた董仲舒廟の南を逕、又東のかた脩市の故城の北を逕。俗之を温城と謂ふは、非なり。応劭云ふ、『脩県の西北二十里に脩市県有り』と。桑社溝下つて信都の脩に入る」と。案するに、『漢志』、「渤海郡」に脩市侯国有り。莽「居寧」と曰ふ。之に拠るに、仲舒は広川、脩県の脩市城の人なり。温城は其の俗称なり。『大清』一統志(巻十五)に、「脩の故城は今の景州の南に在り。脩市の故城は今の景州の西北に在り」と。『魏』(書)地形志、冀州渤海郡の脩県に「董仲舒祠有り」と。沈、『漢志』の昌城(志)、「昌成」に作るを以て之に当つるは、誤り。○天啓本、「城」を「成」に作る。
- ② 『白虎通』五行篇に、「金は水を生み、水は火を滅ぼし、其の理に報ず。火は土を生み、土は則ち水を害し、能へて禦ぐ無し。」
- ③ 『白虎通』(五行篇)に、「水の位は北方に在り。北方は、陰氣、黄泉の下に在りて、万物を養ふに任ず。水の言たる準なり。物を養ひて平均し、準則有り」と。『南齊』(書)五行志に「洪範五行伝」を引きて云ふ、「水は北方なり。万物を冬蔵し、氣、陰に至る」と。
- ④ 『白虎通』(五行篇)に、「金は西方に在り。西方は、陰始めて起り、万物禁止す。金の言為る禁なり」と。
- ⑤ 『白虎通』(五行篇)に、「土は中央に在り。中央は万物を上(吐)の誤)含するを主る。土の言為る吐なり」と。
- ⑥ 『白虎通』(五行篇)に、「火は南方に在り。南方は、陽、上に在りて、

万物委(垂の誤)枝す。火の言為る委随なり。万物布施するを言ふ」と。

⑦ 『白虎通』(五行篇)に、「木は東方に在り。東方は始めて動き、(原典「東方者陽氣始動(東方は陽氣始めて動く)に作る)万物始めて生ず。木の言為る触なり。陽氣動躍し、地に触れて出づるなり」と。

⑧ 「諸」は猶ほ「凡」のごときなり。

⑨ 『塩鉄論』論菑篇に、「文学曰く、『始め江都の相董生、推言す、陰陽四時相繼ぎ、父之を生み、子之を養ひ、母之を成し、子之を蔵す。故に春の生は仁、夏の長は徳、秋の成は義、冬の蔵は礼なり。此れ四時の序、聖人の則る所なり』と。『白虎通』、人事を論じ、法を五行に取るに、亦父子を以て説を為すこと多し。

⑩ 語は亦五行之義篇(第四十二)に見ゆ。盧云ふ、「上の『行』は、字の如し。下の『行』は、下孟の反なり」(『春秋繁露注』)と。

⑪ 凌云ふ、「春秋元命苞」に、「陰陽聚りて雲と為り、和して雨と為る。陰陽怒して風と為る」(『春秋繁露注』)と。按するに、『御覽』(巻十)に引きし『繁露』に、「陰陽の二氣の始めて蒸するや、有るが若く、無きが若く、実なるが若く虚なるが若し。団攢聚合して、其の体稍々重く、虚に乗じて墜つ。風多ければ則ち合ふこと速し。故に兩大いにして疏なり。風少なければ則ち合ふこと遅し。故に雨細くして密なり」と。今の繁露に無き所と為す」と。

⑫ 『黄氏日鈔』(巻五十六、読諸子、春秋繁露)、「地不敢有其功、一掃于天(地敢へて其の功を有せずして、一に天に掃す)」に作る。

⑬ 上の「命」の字、疑ふらくは下句の「曰」の字の上に在りしかと。「氣」疑ふらくは、「下」に作りしかと。陽尊陰卑篇(第四十三)に、「雲を出して雨を起すには、必ず之より下らしめ、之を命づけて天雨と曰ふ」と。○凌本「天氣」を「天命」に作る。

⑭ 此れ即ち『易』坤卦の「章を含む、貞にす可し。成す無くして終はることあり」(六三爻辭)の義なり。『御覽』(巻三十六)に引きし『春秋

元命苞』に、「土、位無けれども而も道在り。故に太一、化を興さず、人主、職（原典「部」に作る）に任ぜざるも、地、雲を出して雨を起こして、以て天下に合従す。勤勞は地に帰するも、功名は天に帰す」と。注に云ふ、「土（もと）「上」に作る。原典によつて正す）、謙を以て自ら正し、卑を以て自ら斂め、終ひに自ら生養の苦を伐らずして、乃ち雲雨を興して功を為し、一に天に帰す」と。『元命苞』の首めの三語は又引いて『白虎通』（五行篇）に見ゆ。

⑮ 莊二十五年何注に、「大水と日食とは礼を同じくする者にして、水も亦土・地の為す所なり。雲、実に地より出でて上に施し、乃ち雨は功を天に帰すこと、猶ほ臣の功を君に帰するがごときなり」と。

⑯ 『白虎通』（五行篇）に云ふ、「土の四季に王たる所以は何ぞや。木は土に非れば生ぜず、火は土に非れば榮えず、水は土に非れば高からず。土は危ふきを扶け衰へたる助け、其の道を歴成す。故に五行の更々王たるには、亦土に須つなり。土は、四季には中央に居り、時に名づけず」と。又云ふ、「土の時に名づけざる所以は、地王の別名なればなり。五行に比するに最も尊し。故に自ら部職に居らざるなり」（同上）と。

⑰ 『漢書』芸文志の陰陽家に于長の『天下忠臣』有るは、殆ど即ち此の義なり。『白虎通』（五行篇）に、「主幼くして、臣、政を撰るは、何にか法る。土の事を季孟の間に用ふるに法るなり。子は父に順ひ、妻は夫に順ひ、臣は君に順るは、何にか法る。地の天に順ふに法る」と。

⑱ （『国語』周語（下）に、「宮は、音の主なり」と。『淮南』墜形訓に、「音に五声有り。宮、其の主なり。色に五章有り。黄、其の主なり。味に五変有り。甘、其の主なり。位に五材有り。土、其の主なり」と。○凌本、「盛」を「貴」に作る。

⑲ 兪云ふ、「河間献王、『夫れ孝は天の経なり。地の義なり』を以て問ひを為すに、董仲舒は『天に五行有り』を以て『天の経』に對ふ。又『地の義』に對へて曰く、『地、雲を出して雨を為し、氣を起こして風を為

す。風雨は地の為す所なるも、地敢へて其の功名を有せずして、必ず之を天に上ぼし、天より下る者の若くす。故に天風、天雨と曰ひ、地風、地雨と曰ふこと莫きなり。勤勞は地に在りて、名は一に天に帰す。至つて義有るに非ずんば、其れ孰か能く此を行はんや。故に下の上に事ふること、地の天に事ふるが如くするや、大忠と謂ふ可し」と曰ふ。以下当に『此れ孝は地の義と謂ふべきなり』と云ふべきに、乃ち此の『土は火の子なり』の八十二字有り。夫れ上文に既に五行を以て天の経と為す。此れ豈に又五行を以て地の義と為さんや。反覆推求するに、此の八十二字は乃ち五行之義篇（第四十二）脱簡して誤つて此に属するのみ。今訂正するに、當に『五行の主は土氣なり。猶ほ五味の甘肥あるがごとし。得ざれば成らず。土は火の子なり。五行は土より貴きは莫く、土の四時に於ける、命する所の者無けれども、火と功名を分けず。木は春に名づけ、火は夏に名づけ、金は秋に名づけ、水は冬に名づく。忠信の義、孝子の行は之を土に取る。土は五行の最も貴き者なり。其の義は以て加ふ可からず。五声は宮より貴きは莫く、五味は甘より美なるは莫く、五色は黄より盛んなるは莫し。是の故に聖人の行ひは忠より貴きもの莫きは、土徳の爲なり。人官の大なる者は、職とする所に名づけず。相、其れ是なり。五官の大なる者は、主（もと）「生」に作る。彼の『義証』によつて改める」とする所に名づけず。土、是なり』と云ふべけん（『春秋繁露平議』二二）と。興案するに、兪説、非なり。若し此を以て五行之義篇に入れば、文に于いて複を為す。此れ自づから五行の土を取りて地を説くのみ。

〔本文通釈〕

——河間献王が温城の董君に問うた。

『孝経』（三才章に）『夫れ孝は天の経なり、地の義なり』とあるが、これはどういふことだ。

——董仲舒は答えて次のように言つた。

天には五行がある。木火土金水がそれである。木は火を生み、火は土を生み、土は金を生み、金は水を生み、水は冬を實現し、金は秋を實現し、土は春夏を實現し、火は夏を實現し、木は春を實現する。春は養生を司り、夏は成長を司り、季夏は養育を司り、秋は收穫を司り、冬は貯蔵を司る。貯蔵は冬が實現するものである。従つて、(ここには)父が養生させたものをその子が成長させ、父が成長させたものをその子が養育し、父が養育したものをその子が完成させるのであり、それぞれの父の行為はそれぞれの子がこれを継承続行し、決して父の意志を曲げるようとはしない(という関係が成り立っている)のであり、(これは)すべて人の道に他ならない。従つて「五行」とは五つの行為のことである。以上のことから見てみると、父が子に授け、子がそれを父から受けるのは天の道であるとわかる。つまり、『孝経』の「それ孝は天の道なり」は、このことを言うものである。

——王は言った。

善いかな。天の経については聞くことができた。地の義について聞かせて欲しい。

——董仲舒は次のように答えた。

地は雲を養生させ(山間部等に雲がわくこと)、雨を起こし、氣を動かして風を起こす。風雨は地が實現するものであるが、地はその功名を自分のものとせず、決まつてそれを天に差し上げ、(風雨が)天から下るもののように振る舞う。そこで「天風」・「天雨」という言い方はあつても、「地風」・「地雨」という言い方がないのである。最高に義を有するものでなければ、一体誰がこのように行うことができよう。そこで下位者が上位者に仕えること、地が天に仕えるようであるならば、それは大忠とすることができよう。(他方、この地の性格を最も強く持つ)土は火の子であるが、五行の中で土は最も重要な地位にある。(ところが)土は四時(の實現という点)において、(その実現者としての)名

を与えられることがない。(そればかりか、父たる)火と功名を分け合おうともしない。(すなわち)木は春の(実現者としての)名が与えられ、火は夏の(実現者としての)名が与えられ、金は秋の(実現者としての)名が与えられ、水は冬の(実現者としての)名が与えられ(土に与えられる季節の名はないのである)。(このように土は五行の中で最も重要な役割を担いながらも、その功名は自己のものとせず、また父と分け合うこともしない。そこで)忠臣の義と孝子の行いは、(その模範を)土から受け取るのである。土は五行中の最も重要な役割を果たすものである。(そこで、宮・商・角・徵・羽の)五声の中では(土に当たる)宮が最も貴く、(鹹・苦・酸・辛・甘の)五味の中では(同じく土に当たる)甘が最も好ましく、(青・赤・黄・白・黒)五色の中では(また同じく土に当たる)黄が最も盛んなのである。(このように土は五行の中で最も重要な役割を果たしながらも、その功名を自己のものとせず、それぞれの父と功名を分かち合おうともしない。これは孝と言えるが、地の性格を最も強く持つ土が最も孝の徳を持つ。)このことを、『孝経』では「孝は地の義なり」と言っているのである。